

ぶどうの木

第 31 号 (2005年 9 月発行)



基督伝道隊

八幡前田教会
福岡大濠公園教会
戸畑教会

目次

巻頭言	
大いなる主のみわざ	
— 新たな土地を与えられて—	
信仰告白	榎本和義牧師 1
信仰告白	榎本和義牧師 2
信仰告白	内田 千代(前田) 21
信仰告白	正野 潔(前田) 23
信仰告白	隈上 望都(大濠) 25
八幡前田教会の思い出(手紙)	李文珠(カナダ) 29
詩集「別れの日々」より	伊規須太郎(戸畑) 32
病を通して	榎本 和義(大濠) 39
子をもって知る親の恩	金生 一郎(前田) 44
小さなヘルパー達	首藤 正(前田) 46
ニュージーランド旅行記	正野 眞宏(前田) 47
恵みのとき	上田喜美代(前田) 53
私の今の信仰・祈り	尼田 隆巳(前田) 59
わが思い出(移動編四)	鈴木 一幹(前田) 62
編集後記	



巻頭言

榎本和義 牧師

「あなたがたはわが証人、わたしが選んだわがしもべである」

(イザヤ書四三章十節)

この小誌「ぶどうの木」を、暫くぶりに発行することができませんでした。教会の諸事、また私の病氣などで、願いつつも繰り延べになり、ブランクが生じましたが、S兄から、「私のできる事でしたら」と、お申し出をいただき、主が備えて下さった助け手と、感謝してお願いしました。その結果、いつになるのか見当もつかなかった本誌の発行が、迅速に進んで、今日、皆さんにお届けできるようになったのです。「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある」と言われているように、主が導いてくださってここに至ったことを、心から感謝したいと思います。

振り返ってみますと、この「ぶどうの木」は、その誌名をつけた第一号が、昭和四十年五月十二日に発行されています。編集後記には、「はじめサフラン会で出した小冊子が発展して教会誌となった」とあります。手持の資料を調べますと、昭和

三九年十月付で、題名なし、手書きガリ版刷りのものが残っていますので、これがその小冊子であろうと思います。爾来四一年、また「ぶどうの木」と称されて四十年になるわけです。

この小さな冊子の歴史にも、神様の不思議な御業を見ることができます。また、「ぶどうの木」の四十年記念号でもあります。ある方が「ぶどうの木」を読まれて、神様へのラブレターです、ねと言われました。確かに、神様の限らない愛を証しすると共に、私共の主を愛する思いを披瀝したのもでもあります。この巻にも、愛の証しが溢れています。私達を救いに導かれた主は、一人ひとりを主の証人としておられます。ここに集められた一文に接して触発され、皆さんのうちに愛の炎が燃え上がるようにと願っています。

二〇〇五年七月



大いなる主のみわざ

——新しい土地を与えられて——

榎本和義 牧師

「いにしえからこのかた、あなたのほか神を待ち望む者に、このような事を行われた神を聞いたことはなく、耳に入れたこともなく、目に見たこともない」(イザヤ六四・四)

二〇〇三年の六月のことですが、かつて留学していたアメリカの友人を訪問する予定を立てていました。ところが、高齢で寝たきりになって入院しておられたH姉のご家族から、五月中旬に電話がありました。容態が悪くなり、医者からいつ何があってもおかしくないので、心づもりをしておくように言われたとのこと。H姉は福岡の教会で四十年以上もの長い信仰生活を続けてこられた方です。お元氣な頃から、自分の葬儀は私に是非してくれと言われていました。さてそのうなると、六月一日から予定している旅行はどうすべきか考えさせられ、祈りつつ主の導きを求めました。病院へ出かけてH姉にお会いしました。意識が点滅する状態でしたが、幸

い、お話しをすることができました。医者言うほど悪くないのではとも思います。しかし、こればかりは人が決めることはできません。航空券などは既に手配していたので、中止するならば、はやく手続きをしなければならぬ。こういう選択を迫られると、人は弱い者で、自分の我が儘な願いを捨てきらず、不決断の醜態を曝すこととなります。その後、数回訪問をする内に、やはり状態は悪化しつつありました。祈りの中に、主はこの度の旅行計画を中止すべきだと導いてくださいました。今回の旅行は主の御心ではないと確信して、予定日の一週間前になったので、すべてをキャンセルしました。アメリカの友人にも事情を説明して中止を伝えました。

ところが、振り返ってみると、神様の中にはもっと違った御計画があったのです。旅行中止の手配を済ませた週の木曜日、河本信生兄からお話ししたいことがあると言われ、午後、ご自宅を訪ねることにしました。どのようなお話しであるか、見当はつきません。取り敢えず、約束の時間に伺いました。米子姉をはじめ、帰省中の娘さん方、ご家族皆さんが揃っておられました。河本兄からこれまでの事業の経過、また新しいマンシヨン経営の経過・現状などの詳しいお話しをお聞きしました。話の大筋は、お父様の始めた事業も時代と共に変化し、ご自身も体力的に限界がきたと感じられ、二〇〇二年

十二月で事業を終わりにした。その後の生活設計や残された土地を有効に利用する計画を模索して来られたのです。マンション経営が最善ではないかと助言を受け、具体的に計画策定を進めた結果、将来的に見て、どうしても赤字が出る可能性が大きいということになり、この計画を断念することになったとのこと。その結果、事業の整理に伴う銀行の債務が残るため、住居を含めて土地を手放すことになる。ただ、教会の駐車場として使っている場所は、神様の御用にと献げただけだから、今後もお使い下さいという話でした。河本姉は東京におられる娘さん方が自分達の近くに住むようにと勧めてくれるので、不本意であるが、住み慣れた八幡の地を離れるつもりでいる。概ねこのような話でした。

私は予想だにできなかった状況を、すぐには理解できませんでした。しかし、債務の期限などで、事態は切迫していて、ゆっくり考える時間がない。教会に隣接する土地が未知の有者になることのないように、また河本姉がこの地に留まり、共に信仰生活を送れるようにと心の中で主に祈りつつ、導きを求めました。

まず、教会としても全体的に境内地が狭く、駐車場もなく、周辺道路での路上駐車に頼っていました。それを解消するため、何としても土地を得たい。その意味で絶好の機会

です。教会が購入することで、河本姉もこの地に留まることができるようなら、銀行に取りられて転売されるよりはるかに良いことです。そう思って、河本兄に教会へ譲ってもらえないかと打診しました。思いがけない申し出であったようで、一瞬ためらいながら、即座に一つ返事で快諾していただきました。同席のご家族も喜んで同意して下さい、事は一気に結論に達したのです。

河本兄のご両親が信仰によって始めた事業の用地が、神様の不思議な御手に導かれて、事業終了に伴わない、神様の御用へと用いられることになったわけです。一体、誰がこのような展開を予想し得たでしょうか。教会の敷地がもう少し広ければとの願いはありました。今の会堂、牧師館を新築する際、広い土地を求めて、教会を前田の地から移転することも非公式に検討されたこともあったのです。しかし、神様は今回のようなご計画を持っておられたのです。神様は信頼する者に思いもしない、考えもしない道を備えられるものです。

容態が悪化した日姉は、六月一日夜遅く、ご家族に見守られて主の御許に召されました。アメリカ行きを実行していたら、日姉と約束していたことが果たせなかつたでしょう。そればかりか、前述の土地取得のための手続き、支払い関係の処理など、六月中旬までに終わらせなければならぬ諸事務

ができなかったに違いありません。日姉の危篤状態による旅行の中止ということも、その背後に隠された神様の深い意図があったのです。後になって悟ることですが、神様のなさることは、一分一厘狂いのないスケジュールに沿って実行されるのです。

話が決まって、帰宅するなり、さて資金はあるだろうかと心配になりました。譲って下さいなどと後先を考えず景氣の良い話をしては見たものの、これからどうすれば良いのかと心配は募るばかりです。そこで、もう一度祈り、全ての業を始められたのは主であることを確認しました。

「私は神である、今より後もわたしは主である。わが手から救い出しようる者はない。私が行なえば、だが、これとどめることができよう」(イザヤ四三・十三)

この聖言によって、主は「進め」と励まして下さいます。とにかく、教会会計の内容を知りませんから、さっそく調べてもらい、他には伝道隊の本部費が蓄えていましたので、取り敢えずそれを全額当てることにして、必要な資金がろうじて満たされたのです。神様のなさることは、過不足がありません。その結果、会計はすっかり空っぽになりました。

後日、売買契約書を交わし、全ての処理が終わったのは六月十六日ごろであったと思います。僅か半月の間に急転直下、

大きな歯車が動いた感じがしました。神様の御業を目の前にして、身震いするほどの厳肅さを覚えます。「私が行なえば、だが、これとどめることができよう」と。引き続き、所有権移転登記など、役所関係の手続きがなされ、一区切りついたところで、土地を与えられた感謝札拝を現地(工場建物内)で執り行いました。何とも言えない感謝と感動を覚え、た。(その詳細は別項を参照)。

宗教法人として不動産を所有するには、その物件が宗教活動のために用いられていることを、実際に証明しなければなりません。古い工場建物をそのまましておくのは、本来の目的に適わない点もあります。それで、取り敢えず建物を撤去して、更地にし、来会者の駐車場とすることが最低限必要であるということになりました。しかし、そのための資金は全くありません。ある程度目処がつくまで先に延ばそうかとも考えましたが、それがいつになるという確証もありません。ここはただ主に期待する以外にないのです。毎日、祈りつつ、どうすれば良いのでしょうかと主に問いかけました。建物の撤去に幾らかかるのか皆目見当がつかみませんので、見積りだけでも出してもらおうことにしました。山本潔子姉(河本兄のこ長女)が帰省しておられ、実際の役割を引き受けて下さって、業者に見積りの手配など全般をやって下さいました。結局、

その後全ての整備が終わるまで数ヶ月にわたって潔子姉がお手伝いして下さったのです。これもまた、主が備えて下さった最高の助け人であったと感謝しています。潔子姉はいろいろ手を尽くして、最も安い費用で引き受けてくれる業者を見つけてくれました。撤去に一ヶ月はかかるとのこと。つまり、支払いはその後で良いと言うことです。ここまで祈り導かれてきたことですから、きつと神様は必要をその時までには備えて下さる、また、もしそうでなければ、途中であつても、そこで止めれば良いと確信しました。

六月最後の週(六月二十九日)から取り壊しが始まりました。この年は雨が多く、屋外での工事が中心ですから、予定通りに進みません。しかし、これもまた幸いだったと思います。それだけ支払いが先延ばしになるのですから。その間に、教員の方々に特別献金の呼びかけをしました。一人でも多くの方がこの主のわざに加わって、喜びと感謝を味わっていただきたいと願いました。当初の予定では更地にして、周囲にフェンスを設置して、駐車しやすいように砂利を播いておこうということでしたが、雨降りの時のぬかるみを考えたり、後日整備するとしても果たしていつになるかもわかりません。どうしても今のうちにやれることはしておきたいと思いましたが、解体整地が進む中で、祈りつつ主の導きを求めました。

ところが、主は思いがけないかたちで、必要を満たして下さいました。そこで、まず駐車場をどの程度整備すべきか考え、その結果、砂利を敷くだけでは乾燥すれば砂埃になり、雨がふればぬかるむだろうから、アスファルトで表を舗装することに決めました。しかし、業者の方から、地盤が軟弱で舗装しても重量がかかると凸凹になるだろうから、まず地盤改良を施した上で、舗装すべきだと提案がなされたのです。事実、雨降りのあと、水の引きが悪く、ぬかるみにはまり込むほどでした。このまま舗装しても地盤が悪ければ処置なしですから、土地を固める工事をすることになりました。

これまで駐車場の一角に納骨堂を建てていました。倉庫の中にあったので、あまり目立たなかつたのですが、覆っていた倉庫の建物が取り払われるとむき出しの状態です。その周囲も舗装して駐車場にするとあまりに風情がない。なんとかうまく納骨堂にふさわしい環境に出来ないものかと考えました。結局、周囲を庭にして墓前礼拝や野外礼拝などが出来るように整備することにしました。造園業者の方からプランを出してもらい、芝生と煉瓦、石板の歩道などで現在の庭園ができたのです。見事な「ヤマモモ」の木も献げられ、思いがけない風格のある庭となりました。納骨堂も庭の一部になりきって、このために造られた感じがします。不思議なことに、

一つ一つ工事が加わるごとに、それに必要なものが備えられるのです。駐車場周囲もフェンスだけでは殺風景ですから、潤いを持たせるために植栽をすることにしました。業者の方が駐車場に植栽するのは贅沢ですなと言われましたが、単なる駐車場ではなく教会の境内ですから、できるだけそれに相応しくするためです。また地域の人々にも神様の祝福が注がれているところであることを証しするためでもあります。ですから、夜間の照明の問題もありました。これだけ広い場所ですから、夜間暗くなると事故や事件が起きないとも限りません。また、周囲が暗くては近所の方にも迷惑でしょう。様々な検討をして、煌々と明るくするのはなく、控えめながら必要な照度を得る照明を設置しました。後日、周囲の方から、駐車場が明るくて安心と言われたそうです。

もう一つ解決しなければならぬ懸案がありました。教会のトイレの排水が詰まりやすく、臭気が抜けにくいという問題がかねてからあったのです。これまで、その問題で繰り返し対処したのですが、排水路を確保することが難しく、仕方なしに過ぎてきました。この度は敷地が広がり、新しく排水路を確保できることになりました。屋内から排水路が出る所に、外部から会堂に通ずる外階段がありました。階段はほとんど使うことがないので、取り外すことにしました。その

結果、階段上部のスペースを利用して新しいトイレを造ることにしました。会堂から直接利用できるので便利です。階段を撤去する時、シロアリの大きな古巣が見つかり驚きました。排水管も付け替え、流れが良くなり、新規にトイレが増え、シロアリ駆除対策も施し、思いがけない所に手を入れることができたのは感謝です。神様の御計画だったと思います。

従来の敷地と新規の土地とは高低差がありますので、牧師館横花壇を移設して、通路を広げて出入りしやすいように整備しました。これも敷地が広がったからこそできることです。そのほかにも、一階の出入り口に雨よけの庇を設置したり、外壁や屋根の塗装など細々した補修もできました。

こうして全ての業が完成したのが、九月の上旬です。振り返ってみると、あれよ、あれよという間に事が進み、息つく暇もなく主は先だつて行かれました。私共はその後を何とか付いて走ってきました。

「見よ、わたしは新しい事をなす。やがてそれは起こる、あなたがたはそれを知らないのか。わたしは荒野に道を設け、砂漠に川を流れさせる」(イザヤ四三・一九)

まさにこの聖言の通りです。今、周囲を見回すと、以前ここに何があったのか、思い出すこともできないように全く新しいものとなりました。これが「主のみわざ」ではないでし

ようか。祈り求めてきました必要な資金も、主は祈りに応えて不足することなく、余ることなく満たしてくださいました。ただ主を崇めるのみです。

ここまで導いて下さった主は、さらにどのように御業を進めてくださるか、大いなる期待をしつつ、待ち望んでいます。

なお、土地取得感謝式のメッセージと以前に教会員の皆さんにお知らせした文書を、記録として次に記載しておきます。併せてお読み下さい。



教会土地取得感謝式

日時 二〇〇三年六月二十九日(日) 午後三時

場所 河本信生兄宅 旧工場倉庫内

司式者 基督伝道隊 八幡前田教会

牧師 榎本和義

一 黙 禱

二 讚美歌 一九四番

三 聖 書 ローマ人への手紙十一・三三―三六

「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい。『誰が、主の心を知っていたか。だれが、主の計画にあずかったか。また、だれが、まず主に与えて、その報いを受けるであろうか』。万物は、神からいで、神によって成り、神に帰するのである。万栄光がとこしえに神にあるように、アーメン」

四 祈 禱

司式者

愛する天のお父様、あなたの豊かな御愛と恵みを覚えて心から感謝いたします。深い御計画とあなたの御思い、河本小太郎兄とかつ姉をあなたが用いて、この所に一つの種として据えてくださいました。その種は芽生え育ち、一つの枝とな

りました。河本兄に仕事を備えて、今に至るまで顧みていただき、こうしてその使命を終わることができましたことを有り難う感謝いたします。そして更には、この備えられた土地をあなたのものとしてお返しすることができ、心から感謝いたします。どうぞ主よ、あなたがこの業を清め祝し、主の栄光を現してください。今真心の感謝をもって、あなたの御前にひれ伏しています。今日この所に集い、あなたの備えてくださった恵みを思い、感謝の時に共にごすことができます幸いです有り難う感謝いたします。どうぞ、主よ、なお深くあなたの御心を悟り、更に主を愛し、主の御声にお従いすることができません様に、整え顧みてくださるようお願いをいたします。卑しい者を清め、主の霊と力を与えてください。尊き主の聖名によって感謝してお祈りいたします。アーメン。

五 讚美歌 五〇二番

一同

六 式 辞

司式者

ローマ人への手紙十一章三三節、「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」と記されています。さらにその先三五節には「だが、主の心を知っていたか。だが、主の計画にあずかったか。また、だが、まず主に与えて、その報いを受けるであろう

か」とあります。これは言い換えますと、神様は誰にも相談しない、あるいは誰の了解も得ようという方ではないということです。神様は、神様御自身で御計画し、それを実行する、それを完成なさる方。私共の言い方をするなら、まことに身勝手な、「勝手放題だな」と思いますが、神様という方は、そういう方だと思えますし、また、そうでなければ神様ということではできません。神様が、神様らしいことをなさる、それは人の想像のつかないことであります。人が想像のつくようなことをしている神様だったら、我々はあまり信頼しても役に立ちません。私達の思いも及ばない、考えもしない、想像もしなかったことをなしてください、これが、神様の神様たる所以(ゆえん)であります。

ですから、私達の生活、私達自身の生涯もそうですけれど、今日の礼拝で教えられましたように、私達一人ひとりが、真に神様のくすしき御業の中に生かされているわけです。だから、自分で、あれこれ先のことを思い図ったところで、それがそのとおりに行くはずがない。それは神様が導かれるのですから、当然のことです。ところが、それを私達は直ぐ忘れるのです。私の思ったとおりになるであろう、あるいは私の考えたとおりに行くはずだ、いや、私はそうしなければならぬのだと。そこに、私達人間の傲慢と言いますか、

高ぶりというものが生まれてまいります。そのために、神様はいろんな事柄を通して、ピシヤツと謙る（へりくだる）道を教えなさいませう。「そうでした。これはもう、私の知恵じゃありません。私の力ではありません。神様、ただあなたの業です」と言う他はない様にしていただきます。私達を苦しめたり、私達を悲しめるためではなくて、私達に喜びを与え、また、神様がいらっしやることを知って信じて、そして信頼する者としてしようとしておられるのです。実は、私共は人生を楽しむことができるはずなのです。私共は、こうだから、こうなつて、後はこうなるしかないという様に、勝手にスケジュールを決めるから、私達は人生をつまらなくしてしまうんじゃないでしょうか。そうではなく、「神様はこれからどうなさるだろうか」と、そこに神様に対する期待と、信頼というものがありません。今私達がどんな状態に置かれ、どんな事の中に置かれても、そこで神様が働かれる。神様は思いもかけないことをなさるといふ事を、絶えず期待することができるところが、ただ目の前の事だけを見ていると、失望することになります。神様が、私達を導き、私達に備えてくださる道がある。神様がなそうとしてくださることがあるのです。けれども、それは何であるか、今は分からない。しかし、後になると分かり

ます。「ああ、なるほど、このためにこの事が起こった。あの時は、あれは辛くて嫌だと思つたけれど、実はこの喜びのために、あれがあつたんだ」と、後になって分かる。それほど我々は愚かで、知識が浅く、考えることのできない者であることを知っておきたいと思ひます。

戦後、焦土と化した八幡に、昭和二年、八幡前田教会が建てられました。お若い方にとっては、ここにあるのは当然のように思ひますけれど、決してそうじゃありません。北九州八幡という町は、殺伐とした労働都市でありました。今でこそ空気が綺麗になつて、公害のない町、環境優先の町だと言つて、市長が威張つていますけれど、かつてはそんな事はありません。この周辺には八幡製鉄所（現新日鉄）の煙突が並んで、昼夜分かつた黒煙がもうもうとしていました。その当時は公害などという言葉もありません。私の通つた前田小学校の校歌に、「黒煙もうもう」という歌詞がありますが、それは産業優先の象徴だったわけです。煙突から煙が出ないのは、これは国が衰退する証しだと。煙が出ているのを見て、「ああ、今日も活力がある」と思つた時代だったので。ですから、そこに住む人達にとって、まさに砂漠の様な町でありました。今はもう市内電車も通つていませんけれども、その当時、年配の方は思ひ出すことでしょうが、一日に三回ラッシュアワ

一がありました。朝の六時頃から大変な混雑でした。それは製鉄所から何万人という人々が出てくる。また出勤する人々がいます。三交代ですね。それから午後の一時間後に「昼勤」と言ってお昼頃から出かける交代者がいました。そして更に夜の八時か九時頃にまたラッシュアワーがある。その頃は西鉄電車がひっきりなしに走り、その電車に落ちんばかりに掴まって出勤して行く。教会の東、製鉄所の西門前あたりの電停は、昔、緑町と言った。そこは製鉄所の入り口になります。その門から人々が構内に入ります。労働者と言いますか、沢山の人々が往き来していました。また、その八幡製鉄所という官営の製鉄所が栄えて、そういう物質的な繁栄を追い求めた町でありました。

そのような町にあつて、河本さんご夫妻は、このイエスキリストの救いにあずかり、主を褒め称える生活に変えられました。まさに、荒野に湧き出た細い一筋の水流と言つても良いでしょう。河本さんは、福岡の伝道館に、当時の折滝先生のもとに信仰を求めて毎週通っていました。私の父も、昭和七年に献身をいたしました。その当時、そこで献身修養生でございました。河本さんとそこで出会つたわけです。やがて、河本さんは、当時住んでいました中央町から、この前田の地(以前は長者町と言つた)を得られたわけでありす。お

聞きしますと、この所には、かつて醤油や味噌を作る工場があつたそうです。そこを河本さんがお買いになつて、漬物を始めました。

そのいきさつについては、皆さん、よくお証詞などでお聞きになつている様に、以前はお酒屋さんをやっていました。ビールや何かいろんなものを扱う酒問屋をしていらつした。ところがご主人が、信仰を持たれて、酒を飲むということとは、せつかく神様からいただいたこの健康を害することになるからそれは飲まない。タバコも扱っていましたが、それも飲まない。ついては、そういう自分も飲まないものを人に売るわけにはいかない。「これは止めよう」と、そう決められた。これは信仰の一つの具体的な実践であります。そして、それじゃ、役に立つものは何か、それは毎食の食卓をあくする主婦にとつて、漬物というのは大切な価値がある。そこで、この地所を買ひまして漬物を始められたのです。そうしますと、時局と言いますか、昭和十六年から、太平洋戦争に入りました、いろんな物資の統制になつたのです。そして、酒も販売が規制される様になつてまいりました。ところが、その時は、漬物は必需品であつて、統制品から外れていたので。そして、原材料が必要なだけ供給される様になつてきました。かつての同業者たちは、「河本さんは、先見の明がある。あの

時に酒を売のを止めてよかった」。止めた当時は、皆から、「これほど、高収入があるのに、どうして止めたのだろうか」と、「河本さん、ちょっとおかしいのではないか」と言われていた。ところが、結果的にそれは幸いな選択だったので。

まさに神様の御計画でした。この戦争の間、統制下で物資が困る中であつて、河本さんのお仕事は神様が備えてくださった。塩、砂糖、そういったものは、統制から除外されて、業者に優先的に配付される様な厚遇を受けた。そのような神様のお取り扱いの中で、神様の力と、業を信じて、ご夫妻が歩んで来られたのです。戦争が終わりました時に、全てこの所は焼け野原になつて、その時に、河本さんが、昭和二二年でしたでしょうか、今の教会のある場所に、一つの教会を建てて献げられました。それが以前の会堂であります。そこで伝道が始められたのです。

実は、それ以前に、まだ戦前のことですが、河本さんが信仰に入つて、そして福岡に通つておられましたけれども、どうしてもこの信仰を、北九州に福音を伝えて欲しいと、「折滝先生、どなたかを送ってください」と頼まれ、それで私の父が指名され、派遣されて来ました。昭和十四年でした。父の書いたものを読みますと、若いまだ三十歳前後で、一人で八幡駅のホームに立った時に足が震えたと言います。これからど

ういう人生が待ち受けているだろうか、皆目分らない。そして福岡から出てくる時、「榎本さん、北九州の八幡に行くそうだね。あそこは人の住める所じゃないよ」と言われたと言うんです。先ほど申し上げた様な工業地帯ですから、非常に殺伐としていました。決して住むために最適な場所と言える所ではない。本当に仕事をする人達の、働く人々の寄り集まりです。人の心は荒れすさんでいましたし、いろいろな人間的な問題が山積みする土地柄であつたと思います。

しかし、まるで使徒行伝にあります様に、一人のユダヤ人プリスキラとその妻アクラという夫妻がおり、パウロの伝道を陰にあつて支えたように、河本さんご夫妻は、そうやって若い父を、陰にあつて主の御用として良き助けを与えてくださいました。やがて結婚し、私もそこで生まれましたけれども、戦争が終り、今申し上げた様に、教会が捧げられました。その当時は、それを買うお金なんて勿論ありません。しかし、河本さんは、先ず神様を第一にしようと、徹していました。それは御自分の生涯もそうですし、また、仕事の面でもそうでありました。どんな時にも神第一。ですから、小太郎兄はどんな所へ仕事で出かけていても、日曜日には必ず帰つてきて礼拝を守る。ここにいらっしゃるお若い方は、小太郎さんをご存知ないかも知れませんが、非常に体格のいい、

恰幅のいい方でした。そして一番前の席に座っていました。どんなに忙しくても、どんなことがあっても札拝は欠かさない。それは単に札拝に出るといふ事じゃなくて、神様を大切にしていふ、生活の第一番にして行こうという思いです。そうやって、仕事にも家庭にもどんなことがあっても、神様を第一にする。

ご商売を始める時もそうでした。日曜日を休んで札拝を守るといふこと……、昔、まだ中央町の方でお店をしている時も、信仰に入つて間もない頃、日曜日に休むことに決めた。商店街の中ですから、他の店は日曜日に開ける。河本商店だけ閉まっている。商店街の人から、「こんなに沢山人が来るのに、シャッターを閉められて陰気くさい」と文句が出るわけです。それでも、それを貫き通しました。また、ある時は従業員の方が、「日曜日に休まれては困る」と言われる。なぜならば日給制ですから、日曜日に休んだら給料が減るわけです。それを聞いた時に河本さんは、「じゃ、給料をあげるから、日曜日に休んでいい」と、そこまで徹底して神様を第一にしておられる。これは河本兄の信仰の証詞だと思ひます。神様を恐れ、敬う、尊ぶ、そこに命を賭けほどに真剣に信じる。これは河本かつ姉もそうでありました。お二人とも一つ思いになつて、全力を尽くしておられました。

やがて会堂も建て替わつて、そして、小太郎兄もお召されなさいました。その後を受けて信生兄が、この事業を受け継がれました。その後も、語れば語り尽せない様ないろいろなことがありましたが、信生兄もお父さんの歩み、お母さんの生き方、その信仰を遺産として受け継いで、神様を大切にしていふ、恐れ敬つて、聖日を守つて生活しておられます。それに対して神様は、その事業を祝福してくださいました。また、ご両親から譲り受けたものを用いてこられました。

ところが昨年あたりから、少し御自分の体が、別に何処が悪いというわけではないけれど、体力的に衰えてきたので、どうしてもこの仕事を続けていくわけにはいかない。ついでに、「丁度、この地所にマンションを建ててはどうか」というプランが与えられたから、先生、お祈りをしてください」と、昨年の秋頃言つてこられました。父が召された後でありましたから、私は父がいなくなつて寂しくなつていふところに、また、河本さんが仕事を止められる、「愈々寂しくなるな」と思ひました。母がまだおりましたから、「信生さんが、もう仕事を止めるそうだ」と申しましたら、「ああ、そうね、寂しくなるねえ。でもこれで時代が変わるのねえ」と言つたことを、思い出します。

昨年の十二月くらいに愈々仕事をお止めになる。ご両親の代から八八年続いていると先ほどお伺いしましたけれども、長きに亘ってしてきた仕事を終る。そして新しいマンションの経営に乗り出そうとされていきました。そのこと自体が大きな神様の御計画の中にあることだと思われました。今の経済状態、社会の状況を見ると、マンションを経営するのはなかなか難しい問題が沢山あることは事実であります。しかし、それが主の御心ならば、これはなるに違いない。しかし、主がそれを拒みなさるならば、一番良い形で止めてくださるに違いない、私はそう思いました。何度か信生兄や米子姉とお話をしました時も、「先生、どうしても不安もあります」と仰った。「いや、大丈夫、神様が導いてくださるならば成るでしょうし、そうでなければ止められるに違いない。取り敢えず、今『行け』と仰るならば歩いてみましょう」という事をお話しました。そうしましたところが、いろいろと娘さん方が調べてみると、施主である河本さんの将来に大きな負債が残るような計画であることが判明したということでした。そのため、この事は一気にキャンセルにしてしまいました。相手の方は建築許可も取り、公告の白い看板ができました。このご近所にも設計図を配りまして、こういうものを建てますと挨拶もありました。その段階で全部終わりにしたわけです。私

はその時、これもまた神様の御計画なんだ、神様がこのことを止めて、神様の御計画があるんだよと、教えてくださった。神様は懇切丁寧に私達を導いてくださる御方であると、もう一つ教えられました。河本さんご夫妻は、これは駄目だと思つた時の潔(いさぎよ)い引き方、躊躇(ちゆうちゆ)しません。これはやはり神様が働いてくださらなければできないことと知つていらつしやるから、主が止められる時をご存知だから、スパッとそこで何の未練もなくお止めになりました。

キャンセルしたという事をお聞きして、その後はどうなさるのかなと思つて、ご家族に良き導きを与えてくださるよう祈っていました。五月の二九日、丁度一ヶ月前でした。信生兄が「先生、ちょっとお話したいことがあります」と言われたので、お伺いしました。そこでこれまでの経緯(いきさつ)から、現在の状況、これからのことについて、いろいろとお話しをお聞きしました。その時に納骨堂、駐車場としている土地については、以前から教会で主の御用に使つてくださると神様に捧げたものです。これについてこれからも教会が使つてくださいとお申し出をいただきました。私は、それは有り難い、感謝ですと申し上げました。「その他の地所はどうなさいますか」、「いや、何とか売れればと思うけれども…」との事でしたので、さつそく「じゃ、教会に譲ってもらえませ

んか」とお願いしました。この時、河本兄が「まさか、教会がそれを必要としてくださいとは思ひもしなかつた。もしよかつたらお譲りします」と、その時に二つ返事でオーケーが出ました。それから後は、手続きと言いますか、いろいろな銀行との手続きなど全部滞りなく進めていただきました。神様のなさることは本当に驚くべき事だと思ひます。そして先だつて、一月も経たない内に、全部の手続きが終わり、この土地が教会に帰属するものとなり、主の御用に用いられることとなりました。

神様の驚くべき業をもう一度振り返つてみます時に、この信仰の始まりであつたご両親の祈りと願ひが、こういう形で具体化したというほかありません。人の思いを超えて、人がどう思おうと、どうしようと、神様の御計画は貫かれていく。「わたしが行なえば、だが、これをとめることができよう」です。人の思いも及ばない、人が考えもしなかつた業が行われるのです。「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」。本当に神様は、奥深い方です。ここまで神様は事を導いて下さいました。これからも神様は何をして下さいますか。もつと驚くべきことを神様はして下さるに違ひないと、私は期待しています。主が「行け」とおっしゃる所へ、私共が腰を引つからげて従つ

て行きたいと思ひます。神様は先に事をどんどん進めなさいますから、つい、私共は後追ひになりやすい。神様が事を進めてくださる時、一気呵成に前に進んで行きます。主が、今日まで河本兄姉のご家庭を顧みて用いて下さいました。そして不思議な事をして下さいました。私達一人ひとりを、一粒の麦として神様は用いてくださる御方です。

最後にもう一つ読んでおきたいと思ひますが、コリント人への第一の手紙二章九節に、「しかし、聖書に書いてあるとおり、『目がまだ見えず、耳がまだ聞かず、人の心に思ひ浮びもしなかつたことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた』のである」。素晴らしいですね。「目がまだ見えず、耳がまだ聞かず、人の心に思ひ浮びもしなかつたことを」と。どうですか皆さん、今年の年頭に、「わたしは神である、今より後も私は主である」という御言を与えられて、それから六ヶ月経ちました。ここでこのような感謝会が開かれていることを、年の初めに誰が想像したでしょうか。本当に不思議なこと、目で見てもない、耳で聞いたこともない、人の心に思ひ浮びもしなかつたことを、神は御自身を愛する者達に備えられた。神様が備えてくださる事があります。だから、私達は神様に信頼して、「進め」とおっしゃるならば進む、「止まれ」とおっしゃいますなら止まる。これから更に、神様の御

業を期待しつつ、歩ませていただきましょう。

ご一緒にお祈りをいたしましょう。

七 讚美歌 三五五番

一同

八 祈 禱

司式者

「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」。

愛する天のお父様、あなたの測り知ることのできない、到底知ることのできない深い御愛の思いの中で、はぐくみ育てられ、ここまで導いていただきましたことを、真に有り難う感謝いたします。あなたが備えてくださいました一粒の種が実を結び、更に新しい花を咲かさんと、新しい枝を伸ばそうとしていきます。どうぞ主よ、この所を清め祝して、主の栄光を拝することができます様に、顧みお導きください。あなたに、全身全霊一切をお捧げしてお従いしてまいりますから、どうぞ憐れんでお導きください。あなたがあなたでいらつしやることを、神が神でいらつしやることの御業を、なお鮮やかに現しお示してください、お願いいたします。信じて一切を御手にお捧げいたします。尊き主イエス・キリストの聖名によって感謝してお祈りいたします。アーメン。

九 頌 栄

讚美歌 五四一番

一同

十 祝 禱

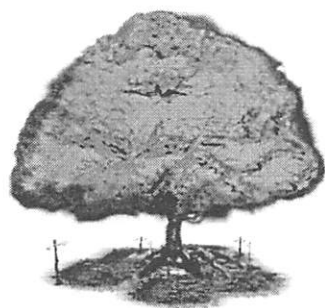
司式者

十一 挨拶

河本信生

私の思うことは、先生のお書きになったものや今日お話になったことで全て語り尽くされています。

両親が心から願っておりましたことが、主の「時」によって成就していただくことができましたことを、天国にいます二人とも大変感謝していると思います。また、歩みを導いてくださった榎本利三郎先生、百合子先生と一緒に天国で喜んでくださっていると信じています。今お話にあった様に、ますます主の御栄光が豊かに現されていくことができます様に、皆さん、これからもご一緒にお祈りくださいますようお願いいたします。今日はどうも有り難うございました。



主にある兄弟姉妹へ

二〇〇三年六月二十九日

基督伝道隊 八幡前田教会

牧師 榎本和義

「あなたの天幕の場所を広くし、あなたのすまいの幕を張り広げ、惜しむことなく、あなたの綱を長くし、あなたの杭を強固にせよ」(イザヤ五四・二)

主の御名を崇めて心より感謝いたします。

日頃より、教会のために、またその働きのためにお祈りいただき、ありがとうございます。主の恵と憐れみのうちに、今日まで導かれてきました。

一九三九年(昭和十四年)十一月三日、故河本小太郎・かつ姉姉の篤き祈りに、主は応えて、故榎本利三郎牧師を八幡の地に伝道者として派遣されました。一九四七年(昭和二十二年)九月七日に旧会堂が献堂されるまで、河本兄の自宅を八幡長者町伝道所として諸集會が開かれていました。一九七四年(昭和四十九年)九月に旧会堂が取り壊されて、新会堂が建設され、現在に至っています。その間、河本小太郎兄弟、また榎本利

三郎牧師夫妻も、主の御許に召されて参りました。

しかし、使徒行伝にある初代教会のように、祈りによって播かれた種は芽生え、育ち、多くの実を結び、私達も神様の御愛に出会い、尊い救いにあずかることができました。背後にあつて、多くの聖徒たちはお祈りと献身による捧げ物をもつて、主の御業に参画してくださいました。主の偉いなる御愛と深い恵みを思うとき、ただ感謝以外にありません。

さて、この度、河本信生兄は長年経営してこられた合名会社河本商店を廃業されました。それに伴つて、会社所有の敷地(自宅を除く)を処分される由、お話がありましたので、教會が譲り受けたい旨を申し入れ、諾否を伺いましたら、破格のご厚意によつて快諾をいただきました。さっそく諸般の手続きを進め、その結果、約二八〇坪ほどの土地が教會の境内地として加えられました。思いがけない事態の急速な展開に、ただ驚くばかりですが、「私は神である、今より後もわたしは主である」(イザヤ四三・一二)との聖言のごとくに、主が不思議な御業をなしておられることを信じて、皆さんと共に大いに感謝したいと思います。私達が受けた信仰の遺産を、さらに次なる世代へ伝えて、主の御栄光を現わすことができますと確信しています。

新しく加えられた土地に建てられている倉庫類を解体撤去し、土地の整地、フェンスの設営、植栽等の工事を明日三十日より開始することとなりました。そのため、約一ヶ月ほど、従来のように駐車場が利用できません。その間、他の交通機関をご利用いただくか、八幡駅前駐車場、または、百円パーキングをご利用下さい。

また、土地の購入をはじめ、付帯工事の諸費用の必要が満たされるようにお祈りくださいますよう、お願い致します。

また、皆さんがこの主の御業に感謝し、喜びを共にできるように、特別献金「教会土地取得・整備のための献金」をさせていただきます。お祈りくださって、金額の多少にかかわらず、喜びを持ってお捧げ下さい。今、私共のなし得る最大にして最高の捧げ物をもって、主を崇めたいと願います。

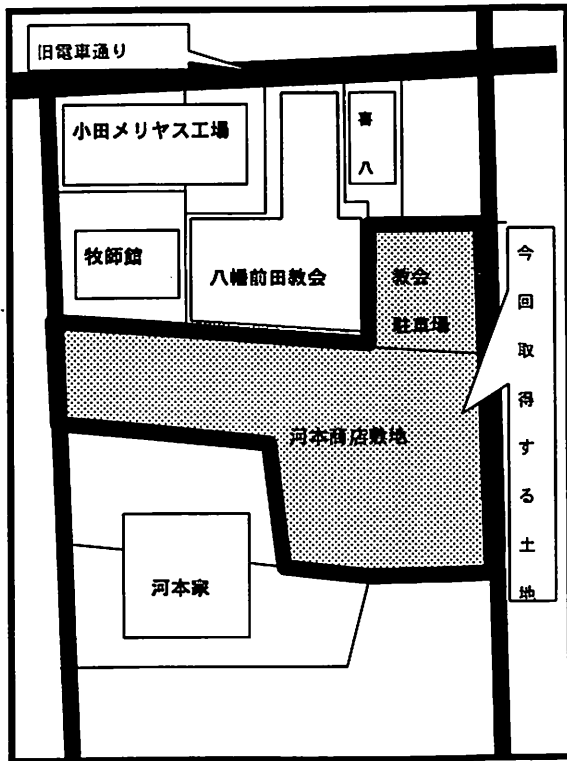
主によって備えられたこの土地が、主に祝福され、聖別されたものとなって、御心に適って用いられるようにとお祈りください。また、私達に与えられたかけがいのない信仰を、さらに多くの人々に伝え、救いの喜びと命に生きる人々が加えられるように、なによりも、まず私達が主の霊に豊かに満たされ、いのちの水が川のごとく流れ出でる者とならせてい

ただきたいと願います。

「あなたがたは、先の事を思い出してはならない、また、いにしえのことを考えてはならない。見よ、わたしは新しい事をなす。やがてそれは起こる、あなたがたはそれを知らないのか。わたしは荒野に道を設け、砂漠に川を流れさせる」

(イザヤ四三・十八〜十九)

主の恵みを心から感謝しつつ。



主にある、愛する兄弟姉妹へ

二〇〇三年九月七日

基督伝道隊 八幡前田教会

「いにしえからこのかた、あなたのほか神を待ち望む者に、このような事を行われた神をきいたことはなく、耳にいれたこともなく、目に見たこともない」(イザヤ六四・四)

主の豊かな恵とご愛を心から感謝いたします。

この度、神様が私共の教会に与えて下さった驚くべき御業を思うとき、心から恐れおののき、ただ感謝するほかありません。すでにご承知のとおり、思いがけない神様のご計画により、教会隣接の土地が与えられました。この土地をどのように利用すべきか、祈りつつ、主の導きを求めてまいりましたが、その結果、まずは古い倉庫類を解体撤去して整地し、駐車場にすること。第二に、納骨堂周囲を整備して、それにふさわしい環境を整えることが必要であるとの結論に導かれました。業者の選定、見積もり等の作業を経て、それらの工事を六月三十日から着手することになりました。しかし、その時点では、主はどのように事を進められるのか、皆目見当

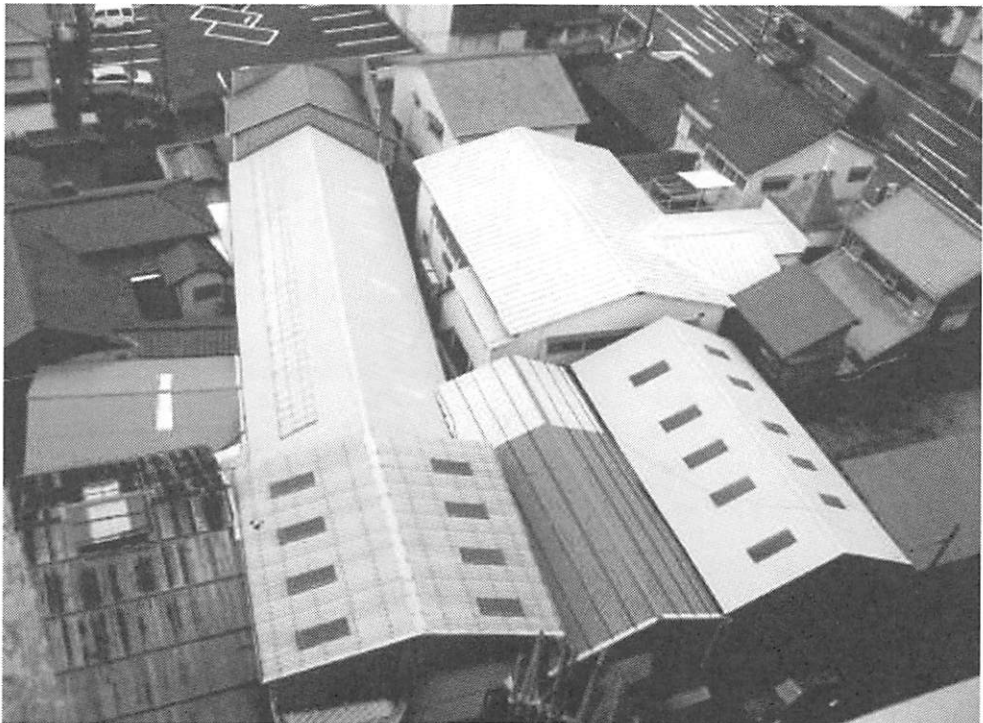
がつかみませんでした。資金的にもまったくゼロの状態でしたが、「主の山に備えあり」と信じ、この事を始められた主は、責任をもって全うしてくださることを確信して、工事に入りました。

当初は、七月末には終わる予定でしたが、ご存じの通りに、雨の多い夏で、予定通り作業が進みませんでした。解体撤去後、整地、周囲のフェンス設営の基礎工事、排水用U字溝埋設、夜間照明設備、出入り口門扉基礎工事、フェンス設置、牧師館前の通路拡幅整備、花壇の移設、汚水排水の改良と会堂二階へのトイレ新設、外壁一部塗装、出入り口雨よけ屋根設置、納骨堂周囲の庭園造成、駐車場部分のアスファルト舗装、フェンス沿いの植栽など、主だった工事だけでも大変多くの作業でした。これらは全て屋外での作業のゆえに、天候に左右され、何度となく予定を組み替えて進められました。しかし、事をなされるのは主でいらっしゃいます。人の思いや計画を越えて、見事に完成させられました。八月二三日に全ての工事が完了し、引き渡しを受けました。これまで、皆様の祈りに、主がこたえてくださったことを深く感謝いたします。また、これらいつさいの必要を主が満たしてくださいました。まことに感謝以外にありません。七月と八月の二ヶ月間に、工事のために与えられた特別献金は総額二千十三万

三千七十六円でした。また、支払いは解体工事代金 百八十二万三千二百二十六円、ガス工事代八万五千五百円、設備・電気・トイレ等代金二百九十五万五百円、庭園・植栽諸費代金五百八十万円、整地・舗装等代金 六百五万八千五百円、雑費三千八百八十五円、支出総額は 千六百七十二万五千五百一十円でした。この短い期間に、これだけの事業を一気に完成させなされる神様の御業に驚くばかりです。

「主の恵みふかきことを味わい知れ、主に寄り頼む人はさいわいである」(詩篇三四・八)との聖言を痛切に体験しております。兄弟姉妹の篤い祈りと、心からなる感謝の捧げ物を主は顧みて下さって、このような言葉にも言い表せない祝福を与えて下さいました。ただただ、主の御前にひれ伏すのみです。主はこのことを通して、さらに私達を新しくしてくださいました。周囲の環境を良くして下さった主は、さらに私共の魂を清め、整え、主に御名にふさわしく、造り替えてくださいます。外側がきれいになっても、内側が腐敗と汚れに満ちているなら、主に喜ばれることはできません。主の恵みに感謝し、御前にある祭壇を築き直して、主の求めたもう標準にまで高められるよう、共に励んで参りましょう。

「主をほめたたえよ。主に感謝せよ、主は恵みふかく、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」(詩篇一〇六・二)



解体前の倉庫群



半分ほど解体が進む



完成された新しい境内地

信仰告白

内 田 知 代 (前田)

一九九九年八月十五日、再び八幡前田教会の玄関を開けることになるとは考えてもみませんでした。

一九九八年の四月に、ひよんなことから新しい職場に就くことになりました。その年の五月末に正野真宏兄が、十月には下川兄が着任されてきました。

私は幼少期に二人の姉達と一緒に、八幡前田教会の日曜学校に出席していました。正野兄から「自分は八幡前田教会に行っている」と話を聞いた時には、この事を黙っていました。一年位たった頃、私の性格と職場の人間関係に苦しんでいたのを憐れんのか、正野兄がキリスト教について私に話をしてくださいました。その時に初めて、教会の会堂が新築されている頃位から小学二年生くらいまでの何年間か行っていたことや、河本家に次姉と一緒に遊びに行っていたことなど告白したと思います。私のことを高木先生にお話されたらしく、先生の日記に記されていてずっとお祈りされていたという話を聞きました。この時は全てのことが単なる偶然だと思っていました。

正野兄がキリスト教の入門書として三浦綾子さんの本を持ってきてくださり、ぐんぐん引き込まれて読み続けました。当時の私は傲慢で自分は何一つ悪くなく、周りの人を許すことができませんでした。

心の中はいつも不安だったのですが、三浦さんの著書の中で文語訳の詩篇第五一篇を読んだ時は心を打たれ、自分の罪に対して涙があふれ、心から謝ることができるようになりました。

職場で正野兄や下川兄と信仰や八幡前田教会について話すことが多くなり、勧めに従い、伝道集会に出席しました。受付で林由記子姉が私のことを覚えていてくださって、隣に座っていただきました。その時に讚美した聖歌四七二番「人生の海のあらしに」は、まだ聖書の御言を全く知らない私の心の愛唱歌になりました。

十月二日、聖日礼拝に出席しました。前奏が始まった途端、会堂全体にすごい力強さを感じました。それから毎週礼拝に出席していましたが、頭の中では主を知りたい、榎本先生がお話されていたような主との手触るような交わりがしたいと求めながらも、一方で主から離れて自分の計画や思いに流されて、何か不安があると聖書を読み、御言を探したりと、フラフラしていました。その度に、「あなたはどこにいるのか」

(創世記三・九)、「しっかりと祈るのである。恐れることはない」(マタイ十四・二七)と呼びかけられていました。昨年末に父が癌に冒され、入院から二ヶ月も経たないうちに亡くなりました。その間、職場にて契約更新はしないと宣言されました。この先どうなるのだろうかと不安になり、祈っていました。

大晦日に新年を迎えるに当たり祈っていましたら、「わたしは神である、今より後もわたしは主である」(イザヤ四三・十三)、「私に繋がっていないさい。そうすれば、わたしはあなたとつながっていないよう。」(ヨハネ十五・四)の御言が与えられました。頼りは自分の知恵や知識・経験でもなく、他人でもない。主であり、イエス・キリストであることを確信しました。教会に行くことと今年の標語になっていたので、より強く私の御言として握ることになりました。

恵みの日は続き、長い間医者から手術を勧められていましたが、祈って決断することができました。入院するための仕事の引継ぎ等も整えられ、次の仕事も、最初は人に頼みに行こうと頭の中で計画していましたが、主のみに求めました。偶然、市の臨時職員募集を見て願書を出しました。私の思いは乗り気ではなかったのですが、お祈りをして試験に臨みましたところ、不思議な力により問題を解くことができました。

あとは入院前に面接とトントン拍子に進み、退院後に合格通知が郵送されて、四月一日から職場に出る事ができました。

この世的には、私に不幸が続く、仕事も不安定な臨時職員なので、世間の人からは可哀想に見えるかもしれませんが、私の心の中は主と交わることができて、大いに喜んでいますが、体も半年間通院治療していましたが、医者から検診後順調だと言われました。

職場を去る前に、下川兄から「すがすがしい顔をしてるね」と言われたことを覚えています。下川兄とは第一印象がお互い悪かったのですが(現在では笑い話です)、私の事を奥様の薫子姉にいつも話していたらしく、主の御言に従い、私のためにお祈りをしていただいていたようです。また、先日聞いた話ですが、正野兄と同じ職場になったのは、思いも寄らない急な異動だったということなど、全ては私が主に立ち帰るためのご計画であったことを確認しました。

洗礼に臨むことができて、主に感謝します。

神の子として産声を上げようとしています。引き続き、皆さまのお祈りを願います。

(二〇〇三年十一月二四日受洗)

信仰告白

正野 潔（前田）

私はクリスチャンホームに生まれ育った。しかし、はじめから神を信じているのではなく、むしろ邪魔な存在でした。

大学受験も合格し、また両親の呪縛からも解き放たれ、勝手気ままな大学生活を送りました。そこに私の最大の転機が訪れました。「就職」の問題です。私は迷いました。一般就職するか、父のように安定した公務員になるか、中企業の社長三人に声をかけられていたのか、その会社にコネクションで入るか、また福祉の世界に行くのか、かなり迷いました。そこで公務員を目指して専門学校に通い出したのですが、もともと勉強嫌いということもあって、勉強がはかどりませんでした。しかし、周りの友達の内定をもらい始め、ダブルの焦りで、「鬱」になってしまいました。

その時の私の状態は悲惨でした。何回死んでしまいたいと思っただか分かりません。本当に何もやる気が起きず、ただ時間だけが過ぎていきました。そして五月になり、私の誕生日の日には一食もご飯が食べれないほどになってしまいました。その時、私はふと忘れていた「神様」という存在を思い出し

した。私は神様に対して怒りをあらわにしました。「あなたがキリストならこの俺を救ってみろ！」「本当にいるのか？」などなど、いろいろなことを言いながらも、状態はますます悪くなる一方で、本当に自殺の一手手前まで行きました。

その時、なぜか大学生活で一、二回しか読んでない聖書を手に取り、「ルカによる福音書」を見たくなり、しばらく読み進めていくと、放蕩息子の箇所にぶつかりました。その時、私はこの放蕩息子の話がまさに私の事を言っていることに気がつき、涙がこぼれて止まらなくなりました。「そうだ！私が帰らねばならないところは、ここ（聖書）かもしれない」と思い、放蕩息子のように福岡の方に帰ってきました。それから初めてと言つていいほど、教会に進んで出席するようになり、家拜も出席するようになりました。私の心が何かを求めていることに気がつきました。いつも退屈な説教がとてもうれしく、心の励みとなつていきました。その時、とても印象に残っている言葉が、ヨブ記一章二一節にあるヨブが全てを失った時の信仰です。

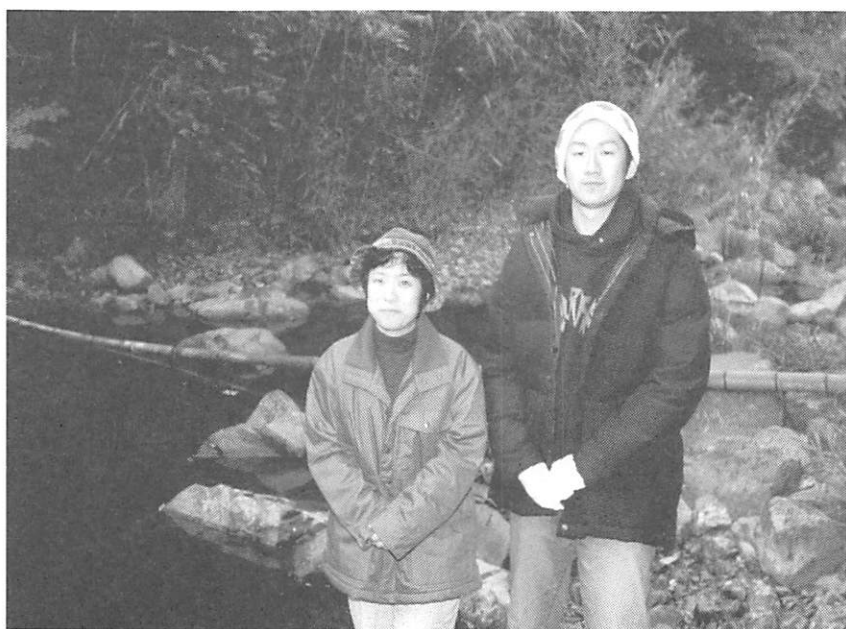
「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。主が与え、主が取られたのだ。主の御名はほむべきかな」。

このヨブの信仰を示された時、「そうだ！私はこの世に何も持つて生まれて来なかった。この世には私の物など一つも

ない。私のものと思っているとところに間違いがある。私の不安や怒りはここから来ている」と悟らせていただきました。

就職が決まったわけではないのに、なぜか心には平安が訪れました。「私が帰るところはここだ。私はここから離れては生きていけない」としみじみ思い、バプテスマを受けようと思つた中で決めました。そこに、ある所の就職試験の情報が入ってきました。「駄目でもともと」という気持で試験を受けました。しかし試験は全くできず、「これは絶対落ちた」と確信を持って言えました。しかし、私の心はなぜか平安であり、「落ちてもいい、神様は必ず私の一番よい所に導いてくださると信じる心に変えられていました。」

しかし、何とその就職試験に合格したのです。その時、私は「私があなたの神である」ということが、心に刻まれました。何という祝福、何という愛なる御方だとしみじみ思いました。神様は私に一番よいことをしてくださいさるといふ確信が、そこで生まれました。私はつい目先の利益で物事を見てしまいましたが、私が「鬱」になって福岡に帰ってきたこと、それから教会に通い出したこと、そして神様の導きによって生きようと思つたところに、就職が決まるという、完璧なシナリオで私を導いてくださった神様に感謝します。これから何があつても神様のみ従つて生きていこうと思つています。



大蔵川上流のバプテスマ会場にて

(二〇〇三年十一月二四日受洗)

信仰告白

隈 上 望 都（大濠）

家が教会であり、父が牧師であるといった、世間一般では余り馴染みのない家で育った私は、幼い頃からそれらが最大のコンプレックスであり、隠せるものなら隠し通したいと常に思っていました。小学校の頃、新学年に上がると、クラスの誰も、そして先生ですらも、私の名前を読むことができず、申し訳なさそうに尋ねてくる先生に、「モトです」と答えると、決まってクラス中から「変な名前〜！」と声が上がリ、これもまた決まって先生から、「あら、素敵な名前じゃない。どんな意味があるの？隈上さんのお父さんは、どこからその名前を付けたの？」と、逃げ場のない質問を投げかけられました。クラスの声も、先生の質問も、私にとっては苦痛以外の何ものでもありませんでした。隠したいけれど、うまい言い訳が思いつかず、かと言って嘘を吐くこともできず、仕方なく、「聖書から付けたそうです」と言うと、「へえ！」という感嘆と、その後しばしの沈黙に取り囲まれたものです。

幼さというのは、時に酷く残酷で、自分の理解の範囲を超えるものは、所謂からかいの対象になるようです。名前が変

わっている、家が教会らしい、日曜日は何か難しい事をするから遊びに行けないらしい……。小学生がクラスメイトをからかうには十分過ぎる材料でした。幸い虐め等には発展せず、友達も沢山居ましたから、学校が嫌だとは思うことはなかったのですが、それでも、またいつあの話題を振られるかと思うと、いつもどこかでびくびくしていた様に思います。

こういった事は中学生になっても続きました。日曜日は部活動に参加しない私にしつこく質問をしてきた先輩に、「家が教会なので……」と言った日からそれはエスカレートし、時には殴りかかってやろうかと思う様なことをされたりもしました。しかしある種、絶対的な縦社会の部活動の中でその様な行動に出る事もできず、次第に私の足は部活動から、そして学校自体から遠のいていきました。そのような事をきっかけに、余り評判の良くない友達と付き合うようになりました。悪い事を覚え、またそういった悪さをする事が、度胸試しやある種のステイタスとなっていたことから、転がり落ちるように悪い道へと進んでいきました。学校や部活動をサボりがちだった私が、納得のいくような成績を貰えるはずもなく、第一志望の高校は受けることすらできませんでした。自分でした事が招いた結果と分かっているながら、誰かを責めずにはいられず、自分に嫌がらせをした先輩を責め、教会である家

を責め、牧師である親を責めました。けれど勿論心は満たさず、自分の中に影ができてゆくのを感じながら、それ以外どうすることもできませんでした。

高校生に上がってからは、名前や家の問題でからかわれる事はなくなり、多くの友達と楽しい学校生活を送ってはいましたが、思春期に屈折した心は癒えることなく、どこことなく他人事のような、宙に浮いた毎日を送っていました。友達は好きだ、学校も楽しい、しかし、私は今何をしていて、何を考えているのだろうか。何がしたくて、どこに向かっているのだろうか。考えても答えの出ない問題に、私は絶対的な自我を失ってしまいました。言う事もする事も、その日の気分によって違い、相手によって態度も性格も変えるようになりました。その方が、その場自体を楽しむ事ができるからです。自分の一番芯の部分は見せない、所謂表面的な付き合いです。

それでも、そんな中でできた一人の友人との出会いは、いくらか私の心を軽くしてくれました。今思えば、似たような性格、似たような考え方、似たような境遇にあった二人が馴れ合っていただけなのかもしれませんが、それでも自分の中の本質的な部分を、少しでも見せる事ができる相手に出会えた事は、非常に大きな喜びでした。それから私達はいつも二人でいるようになりました。高校を卒業しましたが、進学は

せず、大人達から見ればフラフラと遊び歩いていたように見えていたのだろうかけれど、当時の私達なりにやりたい事を見つけようと、それなりに真剣だったのではないかと思います。

しかし数年後、その友人が旅先で突然亡くなりました。電話を取った父からその事を聞かされた時は、状況が全く理解できず、とにかく彼女が亡くなったのなら、私は悲しいに違いない、悲しいならば人間は泣くに違いない、といった義務感と連想から涙を搾り出す事が精一杯でした。

年月がどれだけ経っても、どうしても彼女の死を受け入れる事ができず、けれど、嫌でも聞かされる慰めと励ましの言葉に、私の心以外の部分がそれを認めかけた時から、自分ではどうやってコントロールできない他人のような自分が私の中に出来上がってしまったのです。

自分を見失っている自分を認める事が嫌で、お酒やタバコに頼るようになりました。美味しいから飲んでいるのだと自分に言い聞かせながら、決して理性的な自分を保たない様に相当量のお酒を毎日のように飲みました。勿論そんな精神状態と、健康状態で毎日が普通に過ごせるわけもなく、朝起きる事ができない、仕事に行こうと思っても体が動かない、外出しようとする、激しい腹痛に襲われるといった症状が現われ始めました。しかし、その他に血を吐くとか、激しい熱

が出るといった分かりやすい症状等は勿論出る筈もありませんから、家族からは酷くだらしない生活を送っているように見える・否、実際そうだったのですが、当然風当たりがきつくなり、家にいること事態が苦痛になりました。次第に外で過ごす時間が増えていきました。深夜家を抜け出し、そのまま次の日も家に帰らない事もありました。それ等一つ一つが自分自身を追い詰めていくと分かっていながら、どうする事もできずにいました。

そんなどうしようもない生活から救い出すべく、主が与えて下さったチャンスが一昨年の九月でした。それまで勤めていた会社との契約がまもなく切れるため、更新するか否かの選択を迫られたのです。何かしようと思つた訳でもなければ、何一つ計画もない。けれど、とにかくここから抜け出さなくては、という気持が私自身のどこかにあつたのでしよう。氣付いた時には会社からの誘いを断り、仕事を離れる事を決めていました。以前から誘つて下さつていた榎本先生に電話をしました。来月にも福岡に行きたいといった内容だつたように思います。突然の申し出にも拘らず、待つています、との返事をいただきました。全く予定していなかつた事だつたので、大急ぎで荷物の整理を始め、既に入れてしまつていた予定をこなしました。余りに急な事でしたから、出発の日、父

は仕事で居らず、結局何の挨拶もしないままになつてしまいました。当日の朝まで支度に追われていましたから、母への挨拶もそつけないものでした。慌しく旅立とうとする私に母が封筒を手渡してくれました。中に入ったカードにはこれまでの私との生活等についての振り返りと、これからへの励まし、そして一つの御言が書かれていました。「まず神の国とその義とを求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて添えて与えられるであろう」というマタイ六章の御言です。余りに有名な一節ですから、教会から随分離れていた私ですら、暗記する程に知っていました。ですが、特別に主の導きを感じて行動した訳ではない私には、「また何か書いてあるやん。ああ、この言葉ねえ〜」くらいのも、本当に読み流す程度の一節としか感じる事ができませんでした。

しかし、福岡に来てからの一年半は、正にこの御言通りの、実に恵まれたものでした。

来たばかりの福岡で、仕事を探すもことごとく断られ、途方に暮れていた私に、専門学校への道を開いて下さり、不器用なためバイトと学校を両立できない私に、教会で榎本先生ご夫妻にお世話になるといふ道をお与え下さり、就職活動では求められる事の多い自動車の免許を取りに行く事までさせて下さいました。そして何より、自らの不摂生からボロボロ

になつてしまつていた心身の健康をも少しずつ回復させていただいています。どれ一つ取つても、福岡に来る時には予定も、予測もしていなかつた事ばかりです。

勿論弱い者ですから、新しい生活の中で不安や緊張から体調を壊し、学校に行けなくなつたり、またそれを知られる事が怖くて、教会に行けなくなつてしまつたりした時期もありました。それらを思い悩み、夜眠る事ができず、不健康に拍車をかけるような事すらしてしまいました。しかしその度に、祈る事が許され、本当に主の憐みによつて素晴らしい解決策と共に、願つてもいなかつたプレゼントまでもが与えられてきました。しかも、私が祈り求めていたものは本当に添え物で、それ等はいつても当り前のように備えられ、それとは比べ物にならない程大きな恵みをプレゼントとして与えて下さるのです。

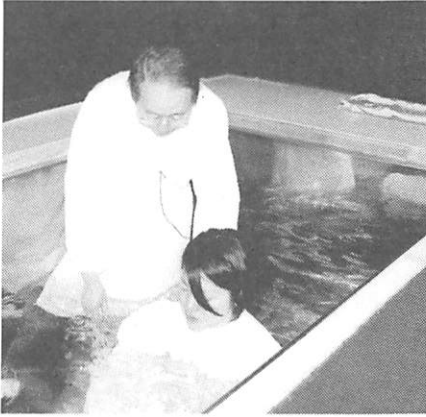
プレゼントを頂いたからと言うと、とても現金というか、調子良く聞こえてしまふようですが、しかし実際そうとしか言ひようのないお恵みの数々です。「神様、私そんな事までお願いしてないのに、本当に頂いていいんですか!？」と、驚きと感謝の言葉の他に言う事がなくなつてしまつた程です。

思えば周りにどう思われるか、何と言われるかばかりを気にして、神様を見ないどころか、隠そうとまでした愚かな私、

弱い自分を認められず、逃げてばかりいた私、またその弱さを人のせいにして他人を責めてばかりいた私を、二六年間お見捨てにならず、あの手この手でお導き下さり、挙句の果てには、山の様なプレゼントの数々……。こんなどうしようもない私を、「それでもあなたは私のものだ」とおっしゃつて下さる神様に、私はもう笑つてこう言うしかなくなつてしまいました。「神様、参りました。私はあなたのものです。」と……。

これから素晴らしい人間になつて、皆から尊敬されて、輝かしい人生が始まるかと言つたら、きつと全然そんな事はなくて、これまでと同じ、どうしようもない私なのだらうけれど、例え何かに負けても、つまづいても、転んでも、落ちて倒れても、それは全て主がなさる事で、私には常に主が付いていて下さいます。必要ならば、他のどんな人が出来ない事をも、私にさせて下さる主が共にいて下さいます。自分のために生きようとすると迷う事の多い者だけれど、これからは主のために生きる事が許されています。主のために私ができる事は何一つないけれど、主が私にさせて下さる事がきつとあることでしょう。それを常に、祈り求めていく者でありたいと思います。

(二〇〇四年四月十八日受洗)



八幡前田教会の思い出(お手紙から)

李 文 珠 (カナダ在住)

「いと高き所には栄光が、地上には平和がありますように」
お懐かしいお便りと榎本先生の告別式のお写真、それに紫
川での受洗のお写真を戴き、本当にありがとうございます。
榎本先生が御国に帰られたこと、私もショックでした。何
だか心の底で、先生は百歳以上までも健在されると信じ込ん
でいたからでしょう。今はイエス様に直々にまみえられ、「よ
き人生を走り抜いた」と勝利の冠を戴いていらつしゃること
でしょう。「人の死にたるとき裁きを受けるは、定められたる
ことなり」と、先生が繰り返しておっしゃっていたことを思い出
します。

先生の召天を通して、尼田兄が主に、また前田教会に立ち
帰られたことを主に感謝し、喜んでいきます。きっと天国では、
凱歌が上がっていたことでしょう。尼田さんは登山が好きな
方で、純粹な心の、少しハニカミ屋さんの、立派な「青年」の
方だったことを思い出します。「娘さんよく聞けよ、山男に
は……」の歌が大好きで、よく歌っていらつしゃったこと、ク
リスマスの祝賀会の準備に大変熱心にお手伝いされていたこ

と、数々の思い出が心に浮かんで来ます。俵雄さんの高校時代のクラスメートでしたね。皆さん両手を広げて、尼田さんを迎えられることでしょうか。良かったですね。

この写真を手にして、「あの頃の前田教会は、とても若々しかったね」と思っています。小野さん、永谷さん、お元気でしょうか。小野さんは、教会誌「ぶどうの木」の名付け親だったことを覚えています。

調悠子さんは神様の奇しき御摂理により、正野家の一員になられ、主に感謝し、また御名を誉め称えていらつしやることでしょうか。ご主人の暢之さんとすばらしい信仰生活を起つていらつしやること、喜びに耐えませんか。

伊規須富夫さんも、主を見上げながらの人生を送つていらつしやることを祈っています。

和義さんが和義先生になられ、主の御用のために持ち上げられたこと、榎本先生にはどんなに嬉しいことでしょうか。きっと天国で和義先生が神聖な器として主の御用を全うされるように、朝な夕なに祈つていらつしやることでしょうか。

正野隆士さんには、クリスチャン事業家として祝福され、事業を通してイエス様の証の生活をされていらつしやること、感謝に耐えませんか。主の御栄光を表す生涯を歩まれ、これ以上の人生はないと思います。どうぞよろしくお伝えく

ださい。

正野真宏さんには、今、大学で大活躍されていらつしやること、何とすばらしい人生でしょうか。心の優しい、思いやりの深い方ですから、学生さんの立場など良く考慮なさつて、よき理解者であり、指導者でいらつしやることと思います。「老人福祉論」などは、三十年前にはようやく名前だけ世に知られるようになった学問でしたが、今、時代の先端を行く学問の指導者として講義なさつていらつしやること伺つて、神様のご計画は何とすばらしいことかと感謝しています。

「主は言われる。私がある方に対して抱いている計画は私が知っている。それは災いを与えようと言うのではなく、平安を与えようとするものであり、あなた方に将来を与え、希望を与えようとするものである」と預言者エレミヤが言っているのを思い出します(二九・十一)。きっと榎本先生が何度も説教なさつたのでしよう、私の聖書には赤鉛筆がゴシゴシと線が引かれています。

私自身が老人の一人となつた今、私どもを特別に対象とした研究がここまで進んできたことを感謝しています。私どものよりよき老後の生活の推進のために、どうぞご活躍ください。神様のお導きと祝福が、毎週の講義に現れますようにお祈りしています。

あなたと榎本先生との出会い、信仰の成長と確信を伺って、私もアーメンと同感の思いです。私の兄が天国に召された事をきっかけに、神様は私どもを呼び戻してくださいました、そして前田教会へと導いてくださいました。貧しい家庭の私どもを一つも差別なく、皆さんが主にあつて兄弟姉妹となつてくださいました。

初めの内は何が何だか分らず、靈感賦は持つて帰るものとはばかり勘違いして、数回家に持ち帰っていたことを覚えていません。それでも、どなたも私どもに注意一つされる方もいらっしゃいませんでした。しばらくして漸く気づき、全部お返ししましたが：。

妹と二人で母を両方から抱きかかえるようにして、毎週教会に通つたあの頃が、人生の一番恵まれた幸せな時だったように思えます。母も貧乏のどん底の中でも、私達が主の愛から離れず、母にしっかりと寄り添つた生涯の中で、天国の平安を経験していたことと思います。

榎本先生は特にローマ書を通して、キリスト教の教義を繰り返し、繰り返し教えられましたね。正野サカエ姉を始め、数々の信仰の先輩の方々のお証を伺つて、私どもの信仰生活の土台が固められていったことを思い、感謝に耐えませんが、物質的には無きに等しい私どもでしたが、イエス様が私ども

の心に宿つてくださつて、天国のローヤルファミリーの一員とされました。榎本先生は、今は神様の玉座の前で、永遠の安息の内に、賛美の礼拝の「毎日」を過されていらっしゃるのでしょうか。

榎本先生を迎えられ、また若い金生先生と共に、前田教会から神様の御言がますます広がり、一人でも多くの方がイエス様の御愛に導かれ、地上にあつて天国の経験をされますようにお祈りしています。

尼田兄にはくれぐれもよろしくお伝えくださいませ。(この尼田さんのお話で、榎本先生が時々、孫悟空の話引用されていたことを思い出しませんか。私達がどんなに神様から逃げ離れたと思つても、いつも神様の御手の中におつしやつていらつしやつたことを思い出します。孫悟空がいつもお釈迦様の手の平から逃げ出すことができなかったように)

我家はみな元気にしています。サムエルはトロント・ドミニオン銀行の三年目のアナリストで、少しは仕事にも慣れてきたようです。(中略)

ハンナも元気で法廷で頑張っています。この夏はハンナとサムエルが二人でロッキーマウンテンの旅をプレゼントしてくれました。サムエルは都合で参加できませんでしたが、ハンナが私をバンクーバーから東北へ、カムループ、ジャスパー国立

公園、バンフ国立公園、カルガリーと連れ添ってくれました。この旅行中に、親子の役割がすっかり入れ替わったことをつくづく感じました。ハンナが何から何まで気を配って、私の面倒を見てくれて、気楽で楽しい旅でした。(中略)

私が高血圧症を持っていますので、子供達から運動が良いということを知っていて、最近ではテニスを始めています。(中略)でも、こんな運動が本当に必要なのか、またいくら何でも役立つのか考えものと思います。私の隣のおじいさんとおばあさんは運動などなさったこともないのに、九十九歳でなくなるまで元気な毎日を過ごされましたし、スポーツの名選手が健康で長生きをするということは聞いたこともないようです。先日、野村美恵子姉のお写真を拝見いたしました。もう八十歳になられたと伺いましたが、「重量挙げ」をなさっていらっしやる様子もないのに、大変若々しくお元気でいらっしやるように見受けられます。やはり「私達の生命は天にあり」と思っています。ですから、運動も程々にすべきと言うことではないでしょうか。ただ子供達の思いやりを感謝しています。



詩集「分かれの日々」より

伊 規 須 太 郎 (戸畑)

片手落ち

高齢化を暗くばかり捉えるのは片手落ちではないだろうか
物に両面があるのだから 明るい面も見なければならぬ
たとえば 教育費が減少する 住環境に余裕ができるなど
世界一の痴呆国になる事も マイナスばかりではあるまい
世界の人々に命の意味を教え 優しさを与える天使になれる

「五体不満足」は五ヶ月でこの四百万部出たという
先天性四肢切断という重度の障害を負った乙武君が
遅く生きることによって 多くの人の心の内にどれほど
明るい火を灯したことだろうか

日本一の豪雪地帯である富山県は 雪を厄介物と見ないで
資源として活用する研究をしているという

- ① 過冷却状態を作り 野菜の鮮度保持に役立てる
- ② 動植物への活性化を科学的に研究する

③ 貯雪槽を作り 雪を圧縮したブロックを保管して

夏場に利用する……など

困った事につつかるとそればかり大きく見えては嘆きやすい
一歩退いて 物事の両面を見る事ができる余裕を持ちたい

(一九九九年三月二日)

心 労

「痛みは人を詩人にする」と言いながら

溢れる思いを次々に書いてきた

「これが止まった時は 忙しいか 病気だな」と思っていた
ところがそれとは違った原因でしばらく止まってしまった
ある人の苦境を訴えられて 共に重荷を負う事となった
ただ事情を聞いて 一緒に心配するのは訳が違う

その人の生涯に関わるかも知れない重大事態!

皆に言えない事情があり 言っても理解できない事もある

本当の事を言えば 本人を深く傷つける事になるし

あちこちに当るかも知れない本質的な問題を含んでいる

聖徒パウロは多くの苦難を経て天国への道をひた走った

「……：……：……：……：……：……：……：……：……：……：……」

日々私に迫ってくる 諸教会の心配事がある

誰かが弱っているのに 私も弱らないでおれようか

(中略) もし誇らねばならないのなら

私は自分の弱さを誇ろう……：……：……：……：……：……：……：……：……」

肉体的に元気な痴呆者は多い しかしどんなに大きな心労

・ 心惑を抱えているだろうか 計り知れない

(一九九九年三月六日)

種

旧約の詩人は歌った

「彼らはバカ(涙)の谷を通っても

そこを(喜びの)泉のある所とします」と

私は「涙の谷を通るからこそ 喜びの泉が湧く」と思う

ことにこの二・三年の痴呆体験を通して しみじみと思う

まことに……：……：……：……：……：……：……：……：……」

病気があるから治癒があり 死があるから復活があり

闇があるから光があり 夜があるから昼がある と言える

痴界を知ったから 真実を知り 偽りも知った

健康が当然と思っていると 病気に怯える

生きているのが当り前となれば 死を恐れる

人間とは弱い者でいつの間にか誤った基準線を

高い所に引いてしまう

常に立つべき所に立ち望外の喜びに溢れて生きるためには
全体のことを知らなければならぬ

これは考え方の問題ではなく 真理に従う事である

「真理に逆らっては何をする力もなく

真理に従えば力がある」と聖書の書いてある

(一九九九年三月六日)

介護どどいつ

講談師田辺鶴英さんは実の母と夫の母の介護体験を生かし
介護講談を新作して 世に問うている

「医者は全国で二十万 内よい医者はたったの〇〇人

よい医者は患者の話聞き 往診もしてくれる医者です

よ」と 前ふりも 病気の話 医者選びの話から始まる

「十八歳の夢を砕いた一本の電話……」と話は続く

「よし！それなら私は介護都々逸という新しい道を開こう」

と考えた 今までは恋愛の情などを歌ったものが多かった

文芸選評というラジオ放送があつて 毎月課題が出る

四月は「みちのく」を各行の頭に折り込むことになっている

選者は中道迅堂氏である

〈伊規須太郎〉

◎ 見ても分からぬ 痴呆の妻は

◎ 脳の破れに ククと笑む(失語症、夫が分からぬ)

◎ 見えているのか チラチラ動く

◎ のの字書くよな 黒ひとみ(誰だろうとシゲシゲ)

◎ みなと一緒に ちよこんと座り

◎ 飲んだ食べたも 雲の上(隣の皿が分からない)

(一九九九年三月十九日)



悲しみ

一人暮らしにも慣れてきた

いろいろ工夫した

各所を大いに整理した

たくさん物の物を処分した

便利なように改造した

新しいものを作った

次第に 泰子のものが姿を消した

ソフト面でもいろいろ試みた

新しい生活リズムができつつある

何でも同じだが イザとなれば

相当のことがやれるものだと思う……だから

あれこれ考えるより とにかく一歩踏み出すことだ

こうして一人暮らしは 七百日を越えた

今日も何事もなく過ぎて行く……

それが悲しい！
(一九九九年三月二十日)

存在

K公園のすぐ近くである 二階から見ると南東隅の桜が
目の下の咲いてこぼれるようである 風に吹かれて

ハラハラと散る様は まことにうるわしい

しかし 泰子と共にこの景色を見ることはもうない

もとの小学校は隅々まで更地となって塀沿いの樹木の中に

桜が四本残っている 日当たりが良くなって勢いがよい

夜散歩の途中その下を通る 見上げる泰子はもういない

南の方角に二筋のサーチライトが今夜も左右に振れている

空にはオリオン座の三星が輝く 泰子はそれらを指差して

よく「ほら」と言った 星の講義をしたこともあった

それらは現に存在するが過ぎ去ってしまったものである

逆に 今ないようだが確実にやってくるものがある

物の存在と目に見るところは同じではないと思う

泰子は家に多くの物を残した それは現実存在している

しかし 彼女の頭の中ではその一切が消失してしまった

物を失うのは盗難や火災ばかりではないとつくづく思った

その逆が信仰である まだ見ていないものを領有する

聖徒は「何も持たないが全ての物を持っている」と言った。

(一九九九年四月九日)

(後見人) ○○福祉事務所長○○○○

(一九九九年四月十五日)

二 連絡

故、伊規須太郎氏は、○○年○月○日○○○○において死去されましたので、ご連絡申し上げます

ここに生前のご厚誼を感謝しますと共に、個人に関わる一切を中止していただきますようお願いいたします。

なお、故人の妻泰子氏は、○○市○○町特別養護老人ホーム○○園(○○病院)に入園(入院)中ではありますが、重度の痴呆症のため、一切の連絡は不可能の状態にあります。

〔連絡先〕

後見人(○○福祉事務所長○○○○)

〒 ○○市○○区○○町○番○号

(TEL) ×××××× (FAX) ××××××

弁護士(○○○○子)

〒 ○○市○○区○○町○番○号

(TEL) ×××××× (FAX) ×××××× 以上

○○年○月○日

悔い

父を送ってから もう四十年になる

胃痛・肝臓痛が手遅れで手術後いくらかも持たなかった母は三三年前 気がつかない間に息を引き取っていた形は違ったが いずれも大いに悔いが残った

今また妻を送ろうとしている

この別れは長い時間をかけて進行中である

もちろん私が先になるかも知れない……その時でも最後まで悔いが残らないようにしたい

今 彼女は私に会ってもほとんど無視(分らない)である

物は一言もしゃべらない……これは非常にづらい!

「分からないんだったら(面会に)行っても無駄だ」

と思いたくなる事もある………実際に!

しかし百分の一でも千分の一でも認識力が残っていると

信じて園通いを続け 呼び掛けをし 接触到努めている

ニコツとすると「分かったのかな？」と嬉しくなる
ある人は「分かっていますよ」と慰めてくださる
女性の会の仲間は

「行かないなんて言ったら私が怒ります」と言う
……………本当のことは神様しか分からない

(一九九九年四月十九日)

心音

胎児は母親の心音を聞いているという
外界の音や人声まで分かっているらしい
胎教の尊ばれるゆえんである

生まれてからも それらは記憶されており
不安になったとき 心音を聞かせると落ち着くという
こんな事は乳幼児期だけかと思っていると
どうやら七十年余り経つてもあるようである

夜中にフト目覚めてザッザッという秒針の音を聞くと
なんとなく安らぐ 音は一秒に一回 脈拍よりも少し早い
私の場合 もう一つの心音が感じられる

耳ではなく 全身・全霊で感じられると言うべきか
脳外科医が頭蓋骨を外して脈打つ脳を見る時のように
私は命の感動に身を震わす……心臓の鼓動に合わせて
命の鼓動が使命と共に伝わって来る

生きている！イヤ生かされている！生かすのは誰でもない
ソフィーへの質問の回答がここにある

(一九九九年四月二十日)

片思い

「磯のアワビの片思い・一方だけから恋い慕うこと」とある
片思いには第一期と第二期があるかも知れない
私達の第一期が片思いだったか思われなかったか分らないが
第二期の今は 私から言うと言つて片思いであり
彼女から言えば片忘れである……思いはもうない

私の片思いは彼女に通じず 彼女は夢世界を浮遊し
彼女の片忘れは 私を生殺しにして夢を見させる
最近も不思議な夢を少なからず見るがメモの段階を出ない
空港で飛行機を見送るとき

次第に小さくなった機影がやがて雲間に隠れるように私は

彼女を仰いでいるが 彼女は機上で私を見失ってしまった

最近の商用航空機は(時速)五〇〇ノットぐらいだろうか

それなら秒速にして二六〇メートル!

私達の別れは緩慢なようだが 文字通り飛ぶように早い!

もし双方が同じ速度で反対方向に飛んでいるとすれば

秒速約五〇〇メートル 期間は丸二年を過ぎたから

三一五三万キロ離れたことになる!

(一九九九年四月二十日)

孤独の味

「老いて輝いて生きる」というラジオ番組だったと思う

新藤兼人さん(八六)が孤独について語っていた

彼の夫人は 俳優の乙羽信子さんと数年前に亡くなったが

生前から「乙羽さん」と呼んでいたらしい

「私は乙羽さんを失って筆舌に尽くし難い孤独・寂しさを味

わっている……なった者でなければ分からない」と言った

「孤独を(映画を通して)描けたら凄いと思う 孤独とは

掴みにくいものであるが 中に一種の爽やかな部分もある

乙羽さんはいいい思い出を残してくれた 寂しさにも味がある……挫折こそ老人の鎧(武器)だ」と言った

聖書に「彼らは涙の谷を過ぐれどもそこを多くの(喜びの)泉ある所となす また前の雨はもろもろの恵みをもってこれを覆えり」(詩篇八四篇)とある

涙の谷が喜びの泉となるなら 多くの涙の谷を経た者は多くの喜びの体験者であり ツワモノである

私も涙の谷を体験している

心は最初からデリケートで脆い

体も次第に脆くなつてゆく しかしシタタカでシブトイ

虚勢を張っている訳ではない 命とはそういうものである

(一九九九年五月十四日)

復活

泰子の進行は早い ストンストンと階段を下るようだ

しかも踏み面が水平ではない………

私の気力も 同じような形で落ちて行くような気がする

「女は強いね 男は三年だつてよ」と誰かが言ったのを
初めは「そんなこと……」と強気で否定していたが

どうも近くなった感じがする……時々氣力が衰え

いろいろな不調が現れる 足腰の衰弱・痛み・視力の異常

起動抵抗の増大（なかなか動き出せない）などなど

一旦動き出すと 持久力はまだまだある……それは

どうしても処理しなければならぬ事も多いし

先送りすれば負担が大きくなる すぐやるのが楽だからだ

それだけに 精も根も尽き果てるということになりやすい

しかしその時、新しい力が沸上がるのをしばしば体験する

命の力とは何と素晴らしいものだろうか！ と思う

人は「自然良能」とか「自然治癒力」などと言うが

小物一つ動かすにも意思と知恵と力（エネルギー）が要る

啄木は 手を見て貧を嘆いたが 私は手を見て歓喜する！

ダビデは月・星を見て「汝の名は地に遍し！」と歌った

（一九九九年六月十九日）

※ これは詩集「別れの日々」の中から、編集者において選

定し、掲載したものです。

病を通して

榎 本 和 義

昨年（二〇〇四年）の五月十九日は、生涯忘れられない日となりました。その日、朝八時過ぎに、かかりつけのN医師から、電話をもらいました。話は二日前に受けた血液検査の結果について、気になることがあるから、相談したいとのこと。

さつそく、医院へ出かけて話を聞きました。それは前立腺癌を表す腫瘍マーカーの数値（PSA）が高くなっているので、精密検査を受けるようにとのこと。その場で紹介状をもらって、すぐに九州医療センターへ出掛けました。これと言った自覚症状もなく、ただ、その年の初め頃より、尿の出口が細くなってきたことには気づいていました。しかし、それは年齢からくる前立腺肥大だろうと、勝手に自分で思いこんでいたのです。その事を相談するためにホームドクターを訪ねたわけでした。

センターの泌尿器科で呼ばれるのを待ちながら、まさか自分が癌になるとはどういう事だろうか、当惑し、信じ難い思いでいたことを思い出します。夢でも見ているような気がしました。青天の霹靂とはまさにこのことです。今、考えて

みるなら、これもまた、神様の計りがたい導きであったというほかありません。

センターの担当のS医師は紹介状に書かれた検査結果をみて、癌である可能性が高いだろうが、エコーと組織検査をしなければ何とも言えない。そのために一泊入院して検査しましょうと言われました。それで六月四日に入院して、午後、エコーを見ながら、患部に針を刺して、組織をとる検査を受けました。検査自体は痛みもなく、十五分くらいで済みました。日帰りでも良いようでしたが、直腸を傷つけているから、一晩泊まって様子を見ましようとのことで、翌日の帰宅となりました。

その時点では「疑い」であって、「確定」したものではありませんが、いろいろと考え、思い煩い、心配が尽きません。その晩は、初めて病室に泊まり、これからどのような経過をたどるだろうか、確定した診断が出ていないので、一縷の望みを持ってみたり、反対に失望して落ち込んだりと、気持ちが定まりません。あるようでないのが信仰と言われますが、自分のふがいなさを徹底して教えられました。浮き沈みの中で、静まってひたすら折りつつ、主の御前に出ていました時、詩篇二三篇、「主は私の牧者であって、わたしには乏しいことがない。主はわたしを緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴

われる。主はわたしの魂をいきかえらせ、御名のためにわたしを正しい道に導かれる。たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわざを恐れませぬ。あなたがわたしと共におられるからです。あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます」との聖言が、心に深く響いてきました。これまでも、度々読んでいる言葉ですが、この時の私には、神様が直接語ってくださいったように思われました。そうだ、「主はわたしの牧者」、すなわち、私の健康も、命も、生活も全てを握っておられるのは神様であることを、今一度ハッキリと悟って、確信しました。羊は自分の力では生きることができない。仲間同士でも助け合うことはできない。牧者(羊飼)がいなければ無能無力なものです。そうであれば、私があれば悩むことはない。主が全てをご存知で、導いておられるのです。この病も、主の御手から出たこと、だから主の全能の手に委ねようと、心が定まりました。

六月十八日に、組織検査の結果を聞きに行きました。想像した通り、癌細胞がありました。医師の所見は癌の性質は中程度、広がりには前立腺内に限られている。また、その位置は中心部にあるから、転移を起こしにくい、などでした。今後の治療方針を決めるために、各種の検査をすることになり、二一日に、MRI、肺の断層写真、三十日下腹部のCT、骨

シンチ(全身の骨に転移がないかを調べる)と、詳細な血液検査など一連の検査が終わり、七月二日にすべての検査結果を聞きました。最終的な結論は、他への転移は見られないので、手術による全摘か放射線による治療かを選択できるとのことでした。最近では放射線で治療する方法が改善されて、良好な結果を得ていることも知っていましたが、それが自分の場合に最適であるとの確信がありません。放射線で治療した結果、再発などしたら、手術にすることはできないとのことでした。それよりも、たとえ放射線でガン細胞を死滅させたと言えども、体内にそれが残っていること自体不快なことですから、むしろ摘出した方がよいのではと考えました。根治が見込める点で、全摘が最善との判断で、手術をお願いしました。即座に、七月二十七日をその日と決めました。

術前の各種検査や手術のために自己血を蓄えるなど、二三日に入院するまで続きましたが、昨年の六月、七月は事の多い時でした。六月は思いがけなく神湊の田中重久兄(大濠)が急性脳梗塞で召され、下旬は花田仁兄の婚約式で沖繩へ出かけたり、七月には貞一彦兄(前田)、猪城なみ姉(大濠)が突然召されたり、また、藤掛斉兄の婚約式があるなど、その他にも、起工式があり、八幡の牧師館改装の手配がありと、あれこれ悩むヒマもなく過ぎました。

七月二三日の午前、数人の兄姉が付き添って下さって、指示されたように、入院手続きをし、病室に案内されて、やっと静かに休養できる状態になりました。多忙な日々であつただけに、いよいよ病氣治療に専念する態勢になりました。不安な中にも、立ち向かおうと心を定めました。

翌日、二四日の夕方、担当医が病室に來られ、お話ししたいことがあるから、別室に來て欲しいと呼ばれました。家内も一緒に言われた部屋へ行きますと、これまでの検査結果やレントゲン、CT、MR、などの資料が集められていました。手術や病状の詳細な説明に続いて、これまでは転移が見られないが、周辺のリンパ節に転移している可能性がある。それは手術して見なければ分からないので、転移があれば手術は終わり、別の治療に切り替えるということでした。

ここでまた不安が生じました。見える状態や医師の説明によって、人の思いが揺れ動くのです。その夜は思い煩いで眠れません。眠れない中で、祈りました。祈っては聖言を反芻している時、「主は私の牧者」の言葉と共に、「この故に汝らに告ぐ、凡て祈りて願ふ事は、すでに得たりと信ぜよ、然らば得べし」(マルコ十一・二四文語訳)と聖言が与えられ、そうだが、ここでこそ神様を信じる以外にない、自分の考えや予想は何の力もない、この聖言のとおり、もう既に癒されたと確信し

ました。

二五日は日曜日でした。まだ治療をしているわけではないので、外出許可をもらって礼拝の御用をさせてもらいました。この礼拝で次の聖言を与えられました。「さあ、わたしたちは主に帰ろう。主はわたしたちをかき裂かれたが、またいやし、わたしたちを打たれたが、また包んでくださるからだ。主は、ふつかの後、わたしたちを生かし、三日目にわたしたちを立たせられる。わたしたちはみ前で生きる。わたしたちは主を知ろう、せつに主を知ることが求めよう。主はあしたの光のように必ず現れいで、冬の雨のように、わたしたちに臨み、春の雨のように地を潤される」〔ホセア六・一―三〕。この病も主がご自身を深く知って欲しいとの御心であること、また、主は癒し、立たせ、生かすことのできる方であると教えられました。

二七日は手術の当日です。幸い火曜会が開かれる日でしたから、皆さんに祈っていただいていることを感じつつ、準備に入りました。手術は午後からなので、昼前から予備的な準備がなされ、術後の必要品も用意されました。午後一時を過ぎた頃に、迎えに来られて、ベッドのまま手術室へ運ばれました。手術室の扉を抜けて、中に入ると別のベッドが用意されていて、そこへ移され、裸の上にバスタオルで覆われまし

た。麻酔の担当者が顔に大きなカップを当てて、「深呼吸をしてください」と言われ、深く二度ほど呼吸をすると、その後は全く意識がなくなりました。

何時間くらい経ったのかわかりませんが、かすかに人の声が入りこえ、ぼんやりした意識のなかで、「榎本さん、予定通り全部取りましたよ」と担当の医師が語るのが分かりました。意識が戻るにつれて、寒気がして、全身震え始めました。途中はどうなったか分かりませんが、病室に戻ったことに気づき、家内の声が聞こえて、「ああ、手術が終わったのだ」と理解しました。同時に、神様がもう一度命を与えてくださったのだと知り、家内と感謝の祈りをしました。午後七時を過ぎていたようです。その晩は痛みと発熱でよく眠れませんでした。とにかく主の御手に守られて無事に終わったことを思って、心は穏やかでした。

じつと寝ていてはダメとのこと、翌日からは、さっそくベッドから起きること、歩くことなど、体を動かすことに努めました。術後の回復も思ったより早く進みました。八月二日には尿道カテーテルが取り除かれ、三日には抜糸となり、全てが皆さんの祈りの執り成しによって、順調に快復して、七日に退院することができました。教会へ戻って来た時には、生き返ったように思われ、ここまで強められて感謝しました。

後遺症としては尿漏れが心配されました。確かに、カテーテルをはずしてから、締まりがなく、尿漏れが続きましたが、それも時間とともに少なくなりました。昨年九月の検査結果は手術による効果が出て、PSA値はゼロに近く、ガン細胞は完全に取り除かれたと診断されました。

病名に「癌」とあるだけに、すぐ「死」を意識することになります。これまで、人は必ず死ぬものだと思っただけでも、まさか自分が死ぬときに近づいているとは思っていませんでした。死ぬことはあるにしても、もっと先の将来だろうと。それだけに慌てふためいたわけです。しかし、自分もやがては死を迎えることになる、その事実をどのように受け入れ、対処するのか、信仰のあり方を探られる幸いな時であったと感謝しています。いつ、どのように主が天に召されるか、分かりませんが、それがいつであつても、喜んで主の御許に帰れるように備えておかなければと思います。

「あなたがたは上にあるものを思うべきであつて、地上のものに心を引かれてはならない。あなたがたはすでに死んだものであつて、あなたがたのいのちは、キリストと共に神のうちに隠されているのである」(コロサイ三・一二―一三)。

手術での全身麻酔とは最小限の機能を残しつつ、限りなく死んだ状態に近づけることだと知りました。キリストを信じ

て、その死にあずかるバプテスマを受け、既に己に死んだ者ですが、この度のことを通して、文字通り、体も死んで、新しく生きる者とされたのです。もはや自分の命ではなく、すでに命は天に預けてしまったのですから、主の限りない御愛と恵みに応えて、キリストのために生きる生涯をまっとうしたいと願っています。多くの方々のお祈りと、ご愛の励ましをいただき、何と感謝してよいか分かりません。心から御礼申し上げます。

なお、その後の経過ですが、三ヶ月ごとの検診をうけ、今年の六月の検査結果も異常なしと言うことです。転移・再発の可能性は常にあります。将来のことを予測することはできません。ただ、今日一日、主の憐れみによつて生かされ、与えられた使命を果たし得るなら、感謝というほかありません。明日のことは主がご存知ですから。続けて、お祈り下さるようお願いいたします。

(二〇〇五年七月記)



子をもつて知る親の恩

金 生 一 郎 (前田)

私が献身して、早いもので十二年になります。そして八幡に遣わされてからも、もう八年になります。あつという間に過ぎて行つたような気もしますが、この間、私の歩みも大きく変わりました。特にこの五年間は、結婚し、子供が与えられるという大きな変化があつた五年間でした。

その恵みを振り返りつつ、今、思うことは、表題にも掲げた「子を持つて知る親の恩」という言葉です。これは一般的に世の中でも言われる言葉ですが、現実はその恵みの中に置かれ、まさにその通りだと思えます。

まず私自身、現在、三人の子供が与えられています。上二人が男の子、一番下が女の子です。これはちょうど私の家族と同じ関係です。私も下に弟と妹がおり、その順番もまさしく、そのままでした。子供の時は、別に特別な事とは思いませんでしたが、今、自分が子育てに当たりつつ、これは大変な事であるということをお知らせしています。同じ親から生まれたからといって、性格も行動もすべて同じとは限りません。それだけに、親としてどのように接すればよいのかというこ

とも、それぞれ違つてきます。いじけてしまつたり、また反発したり、その時々適切に対処できればよいのですが、こちらにも感情に支配されてしまつて、うまくいかない時も多々あります。そんな中で騒いでしまつたり、喧嘩をする子供を見ると、本当に子育てというものは大変な事だと思えます。特に子供が三人となつてからは、その思いが強くなりました。幸いにも、私達の場合は、昨年から教会に住まわせていただくようになり、私もいつも一緒にいるため、恵まれた状態にあります。また、教会の皆様からもいろいろと助けや知恵をいただけるのも、感謝です。私は子供の頃、団地に住んでいましたが、よく弟と喧嘩をして、周囲の方に迷惑をかけていました。今、私達が同じ状況に置かれたら、どうだろうかと考えると、ぞつとするような気がします。自分が苦勞するようになり、親の苦勞が少しづつ分かつてきたように思います。そして両親が育ててくれた事は、大きな感謝であると思えます。

しかし、私が親の恩として思う事は、これだけではありません。もう一つ、それは「人間」の親の恩だけでなく、「神様」の親の恩です。「わたしたちは、すでに神の子なのである」(第一ヨハネ三・二)とありますが、最近、子供と接することを通して、「親」の思いを教えられます。たとえば外出する時に、

子供はいろいろなものに興味を持ちます。買い物などでもあちらこちらに目を奪われ、右へ左へと動き回り、迷子になりそうになります。そこで親である私達は手をつないだりして、行くべき方向へと導こうとします。そこで、こちらもいろいろの行きたい方へ行こうとします。そこで、こちらもいろいろと話して、理解させようとするのですが、子供もだだをこねて、そこにとどまったり、また自分の思いのままに行ってしまうたり、また納得できずにいじけてしまったりします。

その様子を見つつ、私はこの子供の様子は、神様の前に、私も同じようにしているのだと思いました。神様が聖言をもって、歩むべき道を示して下さいにもかかわらず、自分の思いを捨てられず、ぐずぐずとしていたり、また自分の思いのままに突っ走ってしまったりしてしまいます。そう考えると、今、私達の子供の親の前でとる態度と変わりありません。子供に対しては、「何で親の言うことを聞かないのか」と思いつつも、自分は神様の前に同じように歩んでしまう。だからと言って、見放すようなことはしません。何度も何度も待ち続けていきます。時に一度くらいは迷子になったら分かるだろうと思いい、しばらく離れて見ている、迷子になるまで放っておかずに、やはり呼べば、こちらから応えていきます。神様も子供である私達を愛して下さい、自分の思い

のままに歩みがちな私達が立ち返る時に、見捨てずに受け入れて下さいます。その親としての「愛」を教えられ、これも感謝です。

私は、今、「親の恩」という事を、子育てを通して、「苦勞」と「愛」とを味わわせていただいているのだと思います。そして、ただ人間の親子関係だけではなく、私達はさらに神様との親子関係を通じても教えていただくことができます。これは本当に幸いなことだと思えます。これからも日々、生活する中で、様々な事を体験していくことと思いますが、「主の恵み深きことを味わい知れ、主に寄り頼む人は幸いである」(詩篇三四・八)とあるように、主に寄り頼みつつ、主との交わりを通じて、恵みを感じ、受ける者になりたいと思えます。



Little Helpers (小さなヘルパー達)

首 藤 正 (前田)

七十歳を過ぎてから、小さい孫達の世話をする巡り合わせとなりました。初めに断れば済んだものを、気安く引き受けたものですから、保育所に預けるより親の所が何かと都合もよからうし、老いの淋しさも紛れるだろうと、娘なりに考えたのかもしれませんが。月曜から金曜まで、娘夫婦の勤めのあつた日は出がけに連れてきて、また勤めの帰りに立ち寄つて連れて帰るのです。七時半から十八時半まで、どうかすると、もつと遅くまでになることもあります。

三歳の女の子と一歳の男の子の二人を、家内とでお相手をするのです。上の子は、言葉は大抵のことは用が足せるくらい語彙がありますが、下の子は「これ」とか、「あれ」とか、「まだ」とか、そんな単語しかできません。大概のことは、ボディランゲージで済ませるのです。たとえば、大人の手を取つて引つ張つて行き、「これ」と指差して要求を伝えます。幼児の常で、自分のしたいことや要求の実現にはえらく熱心で、したくないことや興味にないことには、全く関心を示しません。それどころか、強く奨めるとそつぽを向くか、さつさとあつ

ちへ行つてしまふかするし、強制すると、あたりかまわぬ大声で泣き出します。家内は(これは女性のもつて生まれた性かもしれないが)、幼児の抵抗・拒絶にもめげず、従わそうと懸命に努力を払います。私はそんなことは、ようしません。

バトル(闘争)を、とりわけ幼児相手となると、する気がしないのです。早く言えば、「無抵抗主義者」を演じてしまひます。「抱っこ」と言われたら、さつと抱き上げますし、「お外へ散歩したい」と言われれば、帽子と運転免許証と鼻紙とガーゼ布をすばやくポケットに入れて、前の道へ手をつないで出て行くのです。

免許証は、身分証明の万一の用意を予めしておくのです。現役時代、同僚が夜ジョギングをしていたら泥棒と間違えられ、警察官に連行されて、いくら口で説明しても信用されず、弱り果てたという話を聞いたことがあります。古希を過ぎれば、不時の用意をしとくに越したことはありません。爺は道に倒れ、右も左も分からぬ幼児が傍らでオロオロするの図なんて、決して見よいものではないはずで、これを老婆心と言いますか、私の場合は老爺心と言われても、ちつとも意に介しませんが……。

毎日、自治区内を孫連れで、徘徊ならぬ散策をやらかすものですから、だんだんに行く先々で顔見知りができて来まし

た。その中でもとりわけ多いのが、孫の面倒見の経験のある老人の男女。それと、同じ位の年齢の子持ちの三十代のご婦人方でありました。

幼児と見ると、頭から警戒心抜きで寄って来て、声をかけてくれるのです。はじめは、子供の方にいろいろと愛想の言葉をかけてきますが、対する方は、せいぜい「コンニチハ」と「バイバイ」ぐらいしかできませんから、間が持ちません。三歳の女の子も、大の大人には顔見知りして、「かたまる」のが普通です。仕方がありませんから、私が代弁して、折角かけてくださる御親切に応えることになるのです。ならざるを得ません。

もともととつつきが悪く、人付き合いの不得手な私が、こうして何の因果か、心ならずも孫をかばって、錆だらけの舌を動かしているうち、いつの間にかしゃべるのが苦痛でなくなり、私としては割りと楽に生身の人間相手に挨拶やら、立ち話もできるようになっていったのです。

正直なところ、三歳と一歳の孫を日がな一日、一真つ向上段な形容をするなら「保育」して、配慮する週五日の、家内との共働きは、自由な時間を甚だしく制約されて、気力的にも、体力的にも、消耗すること大きいものがあります。

近所の六十男性から、「お孫さんからいっばい元気をもらわ

れるでしょう」などと、ありがたいご挨拶を頂戴したのに対して、思わず、「いえ、どうして、どうして、晩飯食って、風呂が済んだら、ナーンニモ元気が残ってませんワ」と答えてしまいました。半分本気、半分冗談です。また、ある人々へは、「会社時代より拘束時間の長いデイサービスですワ」と言ったものです。しかし、けっして付け加えることも忘れません。「おかげでボケ防止にもなりますし、孫のことを小さいヘルパー達と呼んどるんですワ」。

「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにしてくださいることを、私達は知っている」(ローマ八・二十八)

ニュージールランド旅行記

正野 真宏

私達は、平成十六年十月二十一日から二十七日までの七日間、ニュージールランドへ行かせてもらった。これまでは夫婦二人の旅行だったが、今回は、思いがけず小松さん御夫妻と

ご一緒ということになり、親密な交わりの時が与えられ、実に楽しいものとなった。

再びニュージールランドへは行くことはないと考えたと、やはり記録に残してという思いは募り、ペンならぬパソコンの前に座った次第である。例によって、観光案内の旅行記はできるだけ避け、印象的なことを中心に書き連ねたいと思う。

へいきなりの試練

これまで何回海外旅行しただろうか。全てが順調で、一度も困ったということはなかった。神様がいつも祝福してくださった。トルコ旅行の時、福岡空港でスーツケースの鍵を忘れた事に気づいて、無理を承知で取りに帰った時も、神様は突風を吹かせ、飛行機を一時間遅らせて、間に合わせてくださった。だから、今回も当然のように、神様は祝福して一切を順調に導いてくださると思っていた。

ところが、である。一回一回、神様の取り扱いが違うことを認識することとなった。大型台風二十三号との遭遇である。台風発生はニュースで知っていた。この分なら早く通り過ぎ、影響はないと高をくくっていたら、九州に近づくにつれて、やたらと居座って動かない。早く行ってくれ！と団扇であおぎたい気持ちでいたが、まるで、私達の旅行を邪魔しよう

としているかのようになり、出発の日に照準を合わせて接近するではないか。しかも、予想進路が瀬戸内海を通って関西空港の上を通過するらしい。その時間も、出発時刻と同じ夜の九時頃である。

これはやばいと思っている出発前日、旅行会社から連絡が入った。明日は福岡からの飛行機が飛ばなくなる恐れがあるから、今日中に関空へ行き、そこで前泊しますとの事である。とにかく急遽福岡空港へ急ぐ。そこで係員に聞いても、これからどうなるか、行けるかどうか分からないと言う。先が分からぬまま行くというのも、不安なものである。おまけに、台風がすぐ後を追っかけてくるのである。

その夜は関空のホテルに泊まった。翌朝は早い便で出発できるのかなと淡い希望を持っていたが、予定通り今晚の飛行機を待つのだという。考えてみれば、通勤電車と違い、そんなに一日に何便も出るはずもない。早く出発したい、ここまで来て行けなくなるなんてあんまりだという思いが、身勝手なことを考えさせるのだろう。しかし、長い一日、いわば軟禁状態のまま、何をして過ごせばよいのだ。関空の売店を回っても疲れるばかりである。ほとんどベンチに座って、こちらに近づいてくるテレビの台風情報を、沈痛な面持ちで見ているだけであった。状況は悪くなるばかりである。神様、い

ったいどうしたことです、と文句の一つも言いたくなる。何だか意地悪されているようにも思えてくる。頭ではそれを否定しつつも、心はどこかで不満を言っているのである。実に申し訳ないことである。神の許しがなければ、何事も起らない。全ては神の御心のままである。どうなるかと、こうなるかと、神様の手に一切を委ねることにする。

出発予定時刻には台風は過ぎて穏やかになり、少しずつ他の飛行機は飛び立つようになったが、わが機は今日は飛ばないことが分かった。ニュージーランド機は、まず成田空港に着陸し、それからこちらに回ってくるのに、東京へ向かっている台風が行く手を阻み、こちらへは来れないというのだ。何ということだ、関空直行便なら予定通り飛び立つことができたのに。何もかもが悪い方向へ行っているように思える。いやいや、そうではない。主の手に委ねよう。

旅行会社から通告があり、飛行機は明日の十時過ぎ、十三時間遅れで出発することになった、したがって、今晚もここで泊まることになる、台風のためとは言え、旅行日程を縮小せざるを得ず、皆様に大変ご迷惑をおかけする、ついては、旅行を取り止めたい人は、キャンセル料を取りません、皆さんの判断に任せますというものだった。行ける道が開かれた以上、主に委ねてこのまま行こう。小松さん御夫妻も同じ考

えだった。結局、キャンセルしたのが一組、台風で来れなかったのが一組で、二十二名が十八人のツアーになった。

その夜は緊急事態で宿がなく、旅行会社が探した和歌山市内の国民宿舎に泊まった。図らずも小松さん御夫妻と相部屋となり、文字通りの一宿一飯の間柄となった。

冒頭に、七日間の旅と書いたが、正確にはニュージーランド・アランド関空九日間の旅となったわけである。確かに日程は約一日短縮されたが、神様は三日に二日は悪天候ということとを祝福して、マウントクックなどのすばらしい山々やフィヨルドを見せてくださった(末尾の写真参照)。何の支障もなく、予定通りの日程で行っても、天気が悪ければ何にもならない。やはり神様は、今回も祝福してくださったのだ。

へニュージーランドについて

ここで、ニュージーランドを簡単に説明したいと思う。

ニュージーランドは日本の七割の国土に、わずか四百万人が住んでいる国である。福岡県の人口が全国に住んでいると思ってもらえればよい。しかも第一の都市オークランドに百四十万人、他の二、三の都市を加えれば、多分七十%は都市部に住み、残りが地方となる。田舎の方へ行っても、ほとんど人影を見ない。それに人口の十倍はいる羊の国でもある。

至る所に牧場があり、草を食んでいる風景は、まことにのんびりとして寿命が延びそうである。羊の群れを見てみると、なぜか心が休まる。まことに羊は、平和の使者である。

ニュージーランドは英国人が入植して開いた国で、その歴史は新しい。先住民のマオリ族との大きな争いもなく、同化して平和に暮らしているのも、共に羊を飼っているからではないかとも思う。

彼らの暮らし向きは、ほとんどの人が日本人使い古しの中古車に乗っていることから、経済的には決して豊かではないと思うが、自然を大事にし、ゆったりとして心豊かな生活をしているように見える。国民の九割が英国教(聖公会)であることもあるが、自然と羊が多いということもあると思う。

ここで、印象に残った二つのことを記したい。

〈逆転の発想〉

ニュージーランドは南半球に位置する。したがって、気候的には日本とは逆になる。紅葉が盛りの日本を発って、十時間後にニュージーランドに立てば、そこは春の世界である。桜が満開で、チューリップもツツジも、春の花が一斉に咲いている。北島(赤道に近い方)のオークランドが仙台と、南島のクライストチャーチが札幌と同じ緯度であるから、全体的

には北海道的な気候である。ニュージーランドというと、オーストラリアの隣にあつて、暖かい国というイメージがあるが、実際は寒い国なのだ。

南北が逆ということは、日当たりも逆になる。日本では南向きでなければならぬが、南半球では北向きの土地が高級住宅地となっている。

一番驚いたのが、地図である。ある店に入った所で地球儀を見つけたが、何と南半球が上になっているではないか。我々が見慣れた地図からすれば、上下左右全部逆なのである。右側に中国があり、左に太平洋とアメリカがある。九州が上で、北海道が下になる。つまり日本列島が逆立ちしているわけだ。何だか変な感じがするが、よく考え見ると、地球は宇宙を遊泳しているのだから、どちらが上とか下とかはないはずである。北半球を上にした地図を勝手に作ったのは、北半球の人であり、南半球の人が南半球を上にしてもよいわけである。

同じ地球なのだが、上下を逆にするだけでこんなにも違ってくるものかと改めて考えさせられた。つまり、見方を変えるだけで、こうも違って見えるのだ。例えば、蝶々はヒラヒラと飛んでいるが、蝶々から見れば、地球がヒラヒラと飛んでいることになる。一つの事象を一つの見方だけでなく、別な立場から考える、つまり逆転の発想も必要なのだ。

私はふと、信仰も同じなのではないか、固定観念から離れた逆転の発想が必要ではないかと思つた。人間の側からいくら神様のことを考えても、自分の考えに固執している限り分らない。自分の思いを離れて、神様は何とお考えだろうかと、神様の側に立つてみると、成程と分かる。

今回の台風事件でも、私は自分の立場からなぜだと文句を言つたが、神様がご計画をもつてされていることだと分かれば、気を揉むこともなく、穏やかにしておれたはずである。

聖書を読む時もそうである。自分の知識・経験を基準にしていると、書いてあることは不合理なことばかりである。自らを空にして、神様の御心はいかにと聞き従う姿勢をとれば、御霊が真理を拓いてくださる。その奥義の大いなること、驚くほかないのである。

〈従順〉

ロトルアという都市でファーム(農場)ショーがあつた。牧羊犬の仕事ぶりの紹介や、乳牛の乳絞りの実演等があつたが、印象に残つたのは、羊毛狩りである。丸々と着膨れした羊が登場し、牧夫が電気バリカンで刈ってゆくのだが、見ていて可哀想である。実に荒々しく羊を押さえつけ、時には羽交い絞めのようにし、裏返しにし、あらぬ格好もさせる。その間、

羊はされるままである。こんな格好させられて恥ずかしいとか、きついか言わない。牧夫が誤つて傷をつけて血を流したが、その時も痛いとも、仕方が悪いとも言わず、メエーとも鳴かない。毛を刈り取つた後の羊は、実に貧素で見苦しい。こんな姿にさせられたと文句も言わない。実に従順なのだ。

私はその様子を見ながら、神様に従順とはこのことだと思つた。そして、「彼は虐げられ、苦しめられたけれども、口を開かなかつた。ほふり場に引かれて行く小羊のように、口を開かなかつた」(イザヤ五十三・七)、「キリストは神の形であられたが、神と等しくあることを固守すべきこととは思わず、かえつて、己を空しゅうして僕の形を取り、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、己を低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた」(エペソ二・六―八)の御言を思い起こしていた。イエス様は不当な取り扱ひを受け、文字通り裸にさせられ、十字架に釘つけられても、一言半事文句を言われず、最後まで父なる神に従われたのだ。

私はあのような仕打ちを受けても、羊のようにされるがまま、従順しておれるだろうか。わずか、旅行日程が狂いそうになつただけで、文句を言い出す私である。羊がもし抵抗していたら、牧夫はもっと手荒く扱わなければならなくなる。そうなると、羊も傷つくだろう。羊が従順で



サザンアルプスを背景に小松さんご夫妻と

あるということは、牧夫は仕事がしやすくなり、刈り取った後も、羊を大事に扱うことにつながる。それは牧夫にとっても、羊にとっても幸せなことなのである。愛に満ちた神様は、御心に従って、私達を取り扱われる。神様が私達に従順を求めておられる理由が分かったような気がした。



デカポ湖に映るマウントクック

恵みのとき

上田 喜美代（前田）

「あなた方は喜びをもって、救いの井戸から水をくむ。その日、あなたがたは言う、

『主に感謝せよ。

そのみ名を呼べ。

そのみわざをもらもろの民の中に伝えよ。

そのみ名のあがむべきことを語りつげよ。

主をほめうたえ。

主はそのみわざを、見事になし遂げられたから。

これを全地に宣べ伝えよ』（イザヤ十二・三〜五）

私達には 三人の子供が与えられましたが 神様は皆を先に召されました。

それまでには 私達を救いに導かんと、神様の深い、深い御思いがありました。それを知らずに、知ろうともしないで、眩きばかりの日々でした。

二〇〇〇年二月十七日、雪の降った寒い次の日でした。主人は防寒着と暖かいゴム長靴の装備をして若松の海岸に、釣

りに出かけました。しばらく楽しんで場所を変えようとした時に、不覚にも車もろとも海中にダイビングしました。

と言うのは、波止にバックで駐車していましたが、オートマチックのギヤを間違えて、そのままバックをしたから大変。車止めを乗り越えて、海にジャボン！とダイビングしたのです。

後部フロントガラスが割れたお陰で後ろから水が入り、前部が上向いている一瞬に、電動の窓ガラスを開ける事ができました。窓から外に出て、重装備とゴム長靴が抜けない中を、必死にもがいているところを助け出されました。

一つ一つが神様の御手の業です。

まず、車の後ろから水が入り、電動の窓が開いたことが、何よりも神様の御業です。

電気系統は水に弱いから、直ぐに駄目になります。電動の窓ガラスは手動では開きません。それにもまして、水圧がかかってはどうにもなりません。本当に危機一髪、神業です。ただ畏れるのみです。

神様が、こうして一つ一つ御業を示しては、「私だよ」と呼びかけていられます。しかし、それでも自己中心の傲慢な心は、戸を閉ざしています。

子供達が次々に先に召され、これでも、まだ私に分からな
いのかと、何度も、何度も呼びかけていられる神様を尻目に、
いよいよ、もう私達も望みがないよ、死にたいよ、と主人に
しがみついて泣いていると、主人が一言「イエス様を信じる
よ」と言いました。

神様の光が差し込みました。全身が震えるような喜びが湧
き上がりました。

それからまずお寺と縁を切り、仏壇を処分しまして、先生
のもとに行き導きを仰ぎました。主人もバプテスマを受けさ
せていただきました。

その後、神様の平安を与えられ、感謝の日々を過ごさせて
頂いています。

しかし、すぐにお恵みに慣れて甘んじて来るので、神様は
懇ろにひとつの棘を与えて下さいました。

それは、長男の嫁の紅霞さんの故郷である中国に、二〇〇
二年十二月二六日に行った時のことです。私達二人は福岡か
ら上海へ、紅霞さんと健翔君(小学校二年生)は大阪から上海
へと飛び、上海空港で合流しました。飛行機を乗り換えて一
時間ほどで、寧波市(にんぼうし)に着きました。上海市と寧波
市とは同じ浙江省でありながら、飛行機で一時間かかります。

四、五日、雪の降る寒い町をゆつくり見物したり、買い物
をしたりと楽しみました。

滞在六日目の三一日大晦日に、昼食をするためにレストラ
ンに行った時の事です。主人が玄関の大理石のフロアで、五
センチ程の段差につまずいて、右ひざ下を骨折しました。

その場で動けなくなり、タクシーも待てません。エンタク
は沢山走っていますので、エンタクで病院へ行きました。

感謝な事に大学の付属病院が近くにありました、すぐに入
院、手術となりました。異郷の地で言葉も分からないところ
で手術です。

さすがに中国です。大病院でも麻酔はまず針麻酔です。
トレイの中に色分けした長さ二十センチぐらいの針が二十本
くらい用意されました。手術は二時間くらいかかったと思
います。もちろん、西洋医学も取り入れられています。

ポルト五本で接続されました。一ヶ月は絶対安静と告げら
れました。しかし、紅霞さんは日本での仕事があります。孫
の健翔君は学校がありますので、直ぐに日本へ帰りました。

残された私達は不安です。ただこの様な状況に置かれて、
必死に祈りました。そして、神様は私達を中国に永住させら
れるのかしら、例えばそうなくても神様の意のままにと、お任
せすることができました。すると、心は騒ぐことなく、病院

生活を平安に過ごさせていただきました。



寧波市の町並みを臨む

私達は紅霞さんのマンションに滞在していましたから、近くにいる紅霞さんのご家族にも支えられました。その間、人の温かさ、自分ひとりでは生きられないこと、言葉は通じないけど、必死で訴えたら判ってもらえること、幸いに漢字で

筆談できたこと、すべて神様は、逃れの道をも備えられていました。

中国の人は、炊事は全て男子が賄います。女性も働いていますから、お兄さんが私達の面倒を見てくださいました。毎日、病院にも料理を作って見舞いに来てくださいます。

ある日、怪我をしたら必ず食べるのだよと、自宅で食用に飼っていた鳩を、しかも雛を暖めている母鳥を生け捕りにして、スープに仕立てて見舞いに来ました。病院食は食べれないので、いつも白いお粥に日本から持参した梅干、塩昆布、インスタントの味噌汁が活躍していましたので、感謝して戴きました。鶏よりも淡泊です。お兄さんの愛情と鳥達のことを思うと、複雑な気持です。

なぜ母鳥を？捕まえやすいからと言う。雛鳥たちはどうなったのだろうか、今でも脳裏をかすめます。中国では、生き物全てお金になります。犬も食用で売っています。

入院十日後の二〇〇三年一月九日に、無理やり退院しました。帰りは救急車をチャーターしてストレッチャーのまま、寧波市から上海まで高速道路を八時間休むことなく走りました。お兄さんも朝早くから美味しいお弁当を作って、一緒に

付いて来てくださいました。

車中からの眺めは、広大な畑の中に日本の企業が次々と大きな工場が立ち並んでいました。それに伴う従業員のアパート群が建築中でした。それは圧巻でした。

上海ではJCBが手配したホテルに一泊しました。そして、翌日はJCBからの派遣で、東京から看護婦さんが迎えに来ていました。車椅子だから飛行機も優先、座席はファーストクラス、私はリッチな気分です。福岡空港に付くと、チャーターした車が待っていました。自宅に帰るまでストレッチャーのままです。看護婦さんも自宅まで送ってくださいました。神様は至れり尽くせり、道を備えられました。全ての費用（入院費一切を含めて）、JCBカード一枚で清算済みです。何と大きなお恵みでしょう。

帰宅後、製鉄病院に入院しましたが、担当医が「いい仕事をしている」と、賞賛されていました。

若い人なら直ぐに回復するでしょうが、七十才を過ぎてからでは、二年かかってようやく杖なしで歩くことができるようになった。

ここまで回復できたことは、神様の憐れみの他、何もの

もありません。ただただ感謝あるのみです。

「肉親の父は、しばらくの間、自分の考えに従って訓練を与えるが、魂の父は、私達の益のため、そのきよさにあずからせるために、そうされるのである。すべての訓練は、当座は、喜ばしいものとは思われず、むしろ悲しいものと思われる。しかし後になれば、それによって鍛えられる者に、平安な義の実を結ばせるようになる」（ヘブル二・十）

主人も、今回は神様から大きな、大きなお恵みを戴きました。まだボルトが5本入ったままだけど、神様のプレゼントだから、恵みを忘れないためなんだと感謝しています。「さあ、私達は主に帰ろう。」

主は私達をかき裂かれたが、またいやし、私達を打たれたが、

また包んでくださるからだ。

主は、二日の後、私達を生かし、三日目に私達を立たせられる。

私達は御前で生きる。

私達は主を知ろう、

せつに主を知ることを求めよう。

主はあしたの光のように必ず現れいで、

冬の雨のように、私達に臨み、

春の雨のように地を潤される。

(ホセア六・一―三)

今回の怪我を通してみ言葉どおりであることを、ご自身を現して下さいました。この貴重な体験を、自分自身の中で風化させないためにもと、寄稿させていただきました。

ハレルヤ！感謝で一杯です

素敵な詩と出会いましたので紹介します。

☆・病気になるたら・☆

(晴佐久昌英 カトリック司祭)

病気になるたらどんどん泣こう

痛くて眠れないと言って泣き

手術がこわいと言って涙ぐみ

死にたくないよと言ってめそめそしよう

恥も外聞もいらぬ

いつものやせ我慢や、見えや、つっぱりをすて

かっこわるく涙をこぼそう

またとないチャンスをもらったのだ

自分の弱さと思いがかりを知るチャンスを

病気になるたらおもいきり甘えよう

あれが食べたいと言い こうしてほしいと頼み

もうすこしそばにいてとお願ひしよう

遠慮も気づかいもいらぬ

正直にわがままに自分をさらけだし

赤ん坊のようにみんなに甘えよう

またとないチャンスをもらったのだ

人の情けとまごころに触れるチャンスを

病気になるたら心ゆくまで感動しよう

食べられることがどれほど有難いことか

歩けることがどんなに素晴らしいことか

新しい朝を迎えることがいかに尊いことか

忘れていた感謝の心を取りもどし

見過ごしていた当り前のことに感動しよう
またとないチャンスをもたらったのだ

この瞬間に自分が存在しているという神秘
いのちの不思議に感動するチャンスを

病気になったらすてきな友達をつくろう

同じ病を背負った仲間日夜看病してくれる人
すぐに駆けつけてくれる友人たち

義理のことも儀礼の品もいらさない

黙って手を握るだけですべてを分かち合える

あたたかい友達をつくろう

またとないチャンスをもらったのだ

神様がみんなを結んでくれるチャンスを

病気になったら安心して祈ろう

天にむかって思いのすべてをぶちまけ
どうか助けてくださいと必死にすがり

深夜ことばを失ってひざまづこう

この私を愛して生み慈しんで育て

いつか御自分のもとへ呼んでくださるお方に
すべてをゆだねて手を合わせよう

またとないチャンスをもらったのだ
まことの親である神に出会えるチャンスを

そしていつか病気が治っても治らなくても

みんなみんな流した涙の分だけ優しくなり

甘えとわがままをこえて自由になり

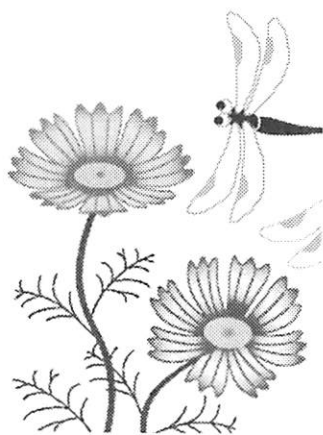
感動と感謝によって大きくなり

友達を増やして豊かになり信じ続けて強くなり

祈りのうちに神の子になるだろう

病気になったらまたとないチャンス到来

病のときは恵みのとき



私の今の信仰・祈り

尼 田 隆 己(前田)

今までの「ぶどうの木」を読んでいますと、皆さん、本当に主に感謝し、褒め称えていらつしやつて、その感謝に励まされ勇気付けられるものばかりです。そこへこのような、いつも迷つてばかりいる姿のお証しが、許されるのかとも思いますが、今の私の信仰の状態を言い表すことは、私なりに神様を褒め称えることであり、自分の心の中を今一度点検し、探り、更に神様にすがつていく一歩となることだと思えます。

先ず、私の今の身分として、罪ある強情な頑な者である自分を、神様は、ひとり子イエス・キリストを送つて、私の罪を十字架によって赦し、神の子の身分を授け、永遠の命に与らしめて、その御愛によって生きる者とせられている者であることは、絶対的な実感であり、感謝であります。一方、私共は神に造られた者で粘土であり、神様の思いのままに持ち運ばれる者であることです。この御方の前には、ただ私は、黙して全ての事を感謝して受け取るばかりの者でなくてはならないと教えられます。私は、死んだ者とならなければなりません。でも自分に死にきれていない自分を日々示されます。

私は神様の前に、何も自分の考えを述べることはできません。述べたとしても、それはどんなに表面を飾つても、その底には自分の欲が絡んでいるからです。口を開けば、いつの間にか自分の欲を申し上げているばかりです。それだから、私の祈りは「主の祈り」、本当にこの祈りの真髄が分かればそれで信仰は全うされると思われますが、私はこれも心底、百パーセントその意味をわきまえていないのでありますが、それにしても、私なりに安心して心から祈ることができるのは、このお祈りだけのようないやがります。しかし、神様は、「絶えず祈りなさい」と命じておられますし、また、「祈りの時、信じて求めるものは、みな与えられるであろう」との約束もあります。が、それも「御心ならば」という、主の「時」があり、私達がその「時」を待ち切れない愚かな者であるということも示されます。だから、自分が祈つても祈らなくても、神様はなさりたいようになさるんだからと、祈ることが少なくなりません。そこでは文字通り「粘土」になるんです。勿論、祈りはなにも自分の願い事をお願いするばかりがお祈りでなく、神様について思い巡らすこと、「主を知ることが切に求める」ことも、大切な祈りであることは教えられているとおりであります。

だから、私のすることは、神様がこんなに恵んでください

ました、と恵みを数えるのですが、その時にふと周りを見ると、神様を信じていない人も同じ太陽の恵みを得ているし、諸々のことがそれなりに上手くいつている。詩篇の七三篇に「私が、悪しき者の栄えるのを見て、その高ぶる者を妬んだからである」とあります。そして、心のどこかに絶えず「まことに、私はいたずらに心をきよめ、罪を犯すことなく手を洗った」と、そこまでは言わないにしても、不信仰の波に打たれているわけであります。この詩篇の記者は「わたしが、神の聖所に行つて、彼らの最後を悟り得たまではそうであつた」と悟るわけですが、私には「その身はすこやかで、つやがあり」とそればかりが見えていて、この詩篇の記者のように悟ることができないのです。横目で世の人をしつかり見て妬んでいる訳です。私達の見の世界はこの世での姿しか見えないものですから、その先の審判とか、裁きとかが見えなく、成功のままで終わってしまう姿しか見えないのですから、この詩篇の記者のように「彼らの最後を悟り得た」と、そこが分からないのだと思います。しかし、イエス様は、それらの人にも立ち返るようにと、憐れみの手を差し伸べておられることも教えられていますし、私達もその様な時に憐れみを受けた者であります。特に私は最近その救いに再度与つた者であります。

信仰の世界とこの世の中との違い。つい最近も「見えるものによらないで、信仰によつて歩きなさい」と信仰の目をもつて見えないものに目を注ぎ、そこに神様の世界を見なければならぬことも教えられてはいます。それこそが信仰であるとも教えられます。が、長年神様を離れた生活をしてきた習性でしようか、自我でしようか、信仰の目を通してものを受け取ることが少ないことを思います。だから、感謝が少ない、神様から豊かに恵まれているにもかかわらず、そこで世の人にも太陽が惜しみなく注がれているのを見て、感謝がしぼんでくるのです。

何事も世の人と比べていて、神様に真直ぐに顔を向けない、世の人が気になる。この世の現実を見ますと、神様に従わぬ人も栄えているようにも思えます。こんな世の中で、神様は何をしていらつしやるのだろうか、殉教者を考えて見ます。世の人の見方から考えて見ますと、憐れで惨めな死に方であり、「神様がいるなら、神様から救つてもらうがよい」と言われながら、殉教していった。世の中の人々からすると、神はいないのであります。しかし、信仰を働かせれば、その鞭打たれ、死んで行く人々と共に神様はそこにいらつしやるのであり、その人を抱いてくださっているわけであります。「ひと粒の麦、死ななければ…」と、その石を投げている人々のた

めにも寛容と御慈愛をもつて赦してください。それを、私は「そんなにはなりたくない」と、正直考えます。

ここで、自分に死んでいない、信仰のない者であることを知らされます。粘土になつていない自分を見せられます。この粘土であるということは、私達が神様から造られた者であるという、創造者と被創造者との関係であり、神様は、絶対者であるという事を自分は本当に信じていないから、自分に死に切れないのか。本当に自分が罪を犯し易い愚かで悟りのない詰まらない者であるという事を主の前に認めてないから、こんなあやふやなことになるのだろうか。このことについて、先日も、これは自分の努力や熱心ではなく、御霊によらなければ分からない、悟れないと教えられたばかりです。

見えないものに目を注ぐには、御霊によらなければできないと教えられます。御霊は、祈る時に注がれる、神様の御思いを悟らしてくださいと教えられます。が、神様に全幅の信頼を置いていない祈りは、神様の御心は天と地が遠いほどに私達の思いとは異なっているから、「神様のすることは分からん」と投げ出し、「御心のままに」と言っても、それは全幅の信頼を置いての言葉じゃないことを探られます。粘土なんだからと無理やり思ってみても、自分を捨て切れない自分がいる。だから、先にも申しましたように、感謝も少ないのだと諭さ

れます。

「天とその中に満つるものはみな私のものである」と、仰せられる神様の世界と、世界史の関係で見る世界とは乖離（かいり）しているようにも見えます。これも、世界史は、見えるものによる見方から見るとためであらうか、この世の歴史は、「よく見れば、天網恢恢、疎にして漏らさず」と言われるけれども、「神様は、果たしてこの世を統治なさっていらっしやるのだろうか」ということにもなってくるのです。

しかし、一方「我々の国籍は天にある」、この世では旅人であるとも言われ、天に望みをおくことを教えられ、「わたしのおる所にあなた方もおらせるためである」と、私達が目指すべきゴールも示されているわけであります。が、これをただ一つの望みとすることもできない悟りのない者です。これで永遠の命を信じているのか。非常に不信仰を示されます。

イエス様の十字架に私の罪は赦されて、私のために十字架が立てられているのは信じますが、その後の、神様の世界が分からない。七月の説教でも、私達が何のために選ばれ召されたのか。それはわたし達が幸せになるためになるためではない。神様を褒め称えるために救われているんだという事を教えられました。これは逆を言うと、神様を褒め称えていけば私達は幸せになれる、私達が考えているよりも比較になら

ないくらいの幸せになれるという事だとも教えられますが、その神様の世界が分からない。頭で分からないでもいいから、飛び込んできなさいという声も聞えてきますが、それもできない。

こういう不信仰で惨めな姿が浮き彫りにされましたけれど、疑問点とともに解決の糸口も各集会で示されていますので、大丈夫だと信じます。そもそも、神様という御方がそう簡単に、私共人間に理解できるはずがなく、一つ一つ私達の経験を通して分からしてくださいさるとも思います。信仰は螺旋階段を登るようなもので、段々と高みに導かれるというお話も耳に残っています。結局今、私はいろいろな点で峻別の時と言いますか、自分の信仰を一つ一つ探られ試されているんだと思います。こういうところからまた、神様が必ず御霊をもつて導いてくださり、何年か後にこれを読んで、また、神様に感謝できる日が来ることを信じています。

(二〇〇五年八月四日記)



わが思い出(台湾編一)

鈴木 木 一 幹(前田)

一 基隆(キールン)港待合室

台湾到着二日目の朝を迎えることができました。わが中隊約二百名の兵隊は、基隆港の駅舎の二階の待合所を仮泊兵舎として、コンクリートの床にゴザを敷き、軍服着用のまま、毛布一枚を使用し、雑のうを枕に一夜を過ごしました。



一月始めとは言え、比較的暖かく、外は昨日から雨が引き続き降っていました。朝食後、中村兵長殿が大声で、「おい、

よく聞け、もうしばらくして、皆に乾燥バナナの配給がある
そうだと言われました。

間もなくして、食事当番兵達が、乾燥バナナの入った木箱
を隊の中央に運んで来ました。「今から一人五本ずつ配るので、
各自受け取るように」と言って、配り始めました。

私は勿論、他の兵隊も今まで乾燥バナナなど見たことも、
食べたこともなく、好奇心を持って待っていました。五本ず
つ配られたものの、サイズは長さが十五センチ位、太さは人
指し指位、色は茶褐色で、パラフィン紙に包んでありました。

皆はしばし眺めていましたが、やがてパラフィン紙を破り、
口に入れていました。確かにバナナの味がして、非常に甘く、
久しぶりに好物に巡り会った感じでした。

満州にいた時は、三食以外には菓子も勿論、甘い物など全
く食べていなかったのです、ここ台湾では果物は勿論、菓子な
どもこれから大いに食べられるとの事で、大変期待していた
わけです。

次に前田中隊長より、次のとおり通達がありました。「わが
部隊名は、台湾第八七二部隊前田隊となった」とのこと。ま
た今日これからの行動予定について、次のとおり説明を受け
ました。「わが中隊は、午後一時頃の軍用列車で当基隆駅を出
発し、今夕に台南市の任地に赴任する。着任先の隊舎、砲廠、

馬舎の位置等については、台南駅に到着後に改めて説明する。
移動中は各班員は、班毎に班長の指揮によって行動するよう
に」とのことでした。

各兵は出発準備のため、
各自の装具や荷物を整理
していたところ、一階の
待合所から帰ってきた兵
が、一階で買ってきたと
ばかり菓子袋を高く掲げ、
「今一階に菓子や果物を売
りに来とるぞ」と皆に知ら
せました。皆はその言葉
を聞いて、それぞれ二階
から待合所に降りて行き
ました。

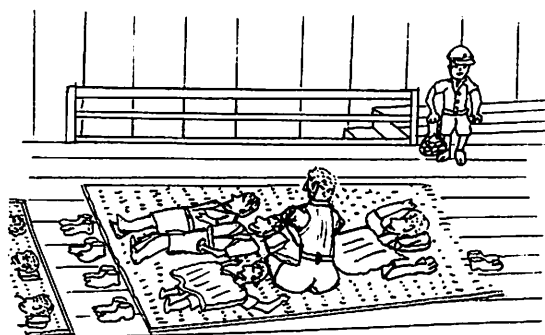
物売りは普通、駅舎内には入れず、中での販売はできない
ことになっていましたが、数日前からの雨で特別許可が出た
とのことでした。物売りはほとんどが女性で、中には幼児を
背負って売っている女もいました。

ヤンチヨ傘を被り、子供を背負った婦人が、「兵隊さんこの
お菓子おいしいよ、買ってよ」、「この菓子、金華糖と言って、



砂糖でできていて、とっても美味しいよ」と言っ、竹の平ザルに入ったお菓子を見せました。傘型の砂糖菓子で、傘の中心に竹楊枝が刺してあり、赤、青、黄、白の四種類がありました。一緒に買いに行っていた川上君が、「これ一個幾らするの」と聞いたところ、「一個二銭あるよ。これ一人一個ずつ味見していいよ」とのことで、近くにいた兵達は、それぞれ一個取って試食し、「これは美味しい」と言っ、ポケットから一円札を出して「二十個買いたい」と言っ、「兵隊さん、まだおつりの小銭がないよ。小銭で四十銭ありませんか」とのこと。

我々は昨日基隆港到着後に、満州銀行券を台湾銀行券に交換してもらいましたが、皆一円札のみのため、小銭の持ち合わせはありませんでした。その兵は、「よし、それでは五十個買うので、色を混ぜて、紙袋に入れてくれ」と言っ一円札を渡



しました。

従っ、川上君も私も同様に一円札を出し、それぞれ買いました。さらに五、六人が買ったため、見る間に売り切れとなりました。他の菓子や果物売りも兵達がそれぞれ殺到し、ほとんど売り切れとなりました。

買い物を終えた兵達は、それぞれ菓子や果物を抱えて二階に帰り、菓子や果物を出し、互に交換して食べ、笑談していました。

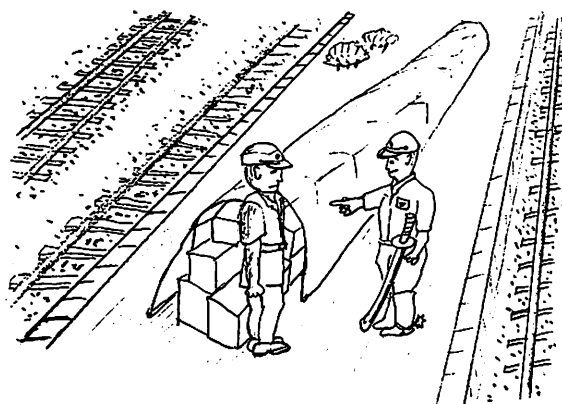
二 糧秣(リヨウマツ)衛兵勤務

いよいよ軍用列車が台南に向かって出発しました。しばらくして、台湾の最大都市の台北に到着し、さすがに駅舎の大きさ、また近くに見える大型建物や人々の流れなど、いずれも政治の中心都市だけあるなあと思いました。台湾総督府と台湾方面軍最高司令部がある街だな、と思いました。

台北駅を出発した後、同車内の佐藤班長より呼ばれ、次の命令を受けました。「台南駅の手前の永康駅の下り線ホームでの衛兵の勤務を命ずる。駅への引率は石井見習士官殿が指揮されるので、これに従うように」とのことでした。

従っ、早速私は班長殿より小銃と小銃弾十五発を受け取り、少し緊張しながら身の回りの用意をしました。

夕方五時過ぎに永康
駅に到着、石井見習
士官殿に付いて下車
しました。下りホー
ムには木箱に入った
糧秣が約五百箱、四
段重ねで約五十メー
トルの長さには並べら
れ、上からシートが
掛けられていました。
「貴様は、只今から今
夜九時まで立哨せよ。
九時ごろ本隊から交



代要員を連れてくるので、それまで約四時間勤務するように」と言つて、前任の歩哨を連れて立ち去りました。私は携帯していた雑のうと背負い袋を体から外して、一番南端の一段になった箱の上に置き、シートを掛けて隠し、次に小銃に玉を五発込め（小銃は一度に五発までしか弾が込められない）、安全装置を施して、右腕の脇に挟み、ゆっくりと糧秣箱の周囲を巡回し始めました。

西側の駅舎の前の方には店舗が多く立ち並び、民家もかな

り建っていて、台湾人が数人歩いているのが見えました。下りホームの東側は、広々としたニラ畑とサトウキビ畑で、その先二百メートル位には立派な中国風の寺院が見えました。ニラ畑では、ヤンチョ傘をかぶった男女の農夫が数人働いていました。



何回廻ったか、一時間位巡回した頃、後ろから大声で「兵隊さん」と呼ばれ、振り向くと、駅員が「兵隊さん、ご苦労さんです。これパインジューズです。どうぞ飲んでください」と言つて、大コップを差し出しました。私は「ありがとう、早速いただきます」と言つて、コップを受け取りました。駅員は「飲んだら、コップは箱の横に置いていてください」と言つて立ち去りました。私は喉が渴いていたので、早速いただきました。とても冷たく、パインの味が何とも言えず、コップ半分ほど

を飲み、残りは箱の上に置き、シートを掛けました。

夕方六時を過ぎた頃、日暮れとなり、早速腰に吊った帯剣を抜き、銃に着剣しました。衛兵の守則として、夜間に人が近づき不審に感じた時には、誰可(スイカ)し、これを三回しても何も返事がなく、当方の指示に従わない時は、銃を発射させてもよいことになっていました。

さて、夜も九時を過ぎ、そろそろ交代の歩哨要員が来る頃となり、まだ夕食も食べてなく、空腹となりました。残りのパインジュースも飲み干し、幾分精神的にも疲れてきました。

時々、上りホームに列車が到着しましたが、遂に降りて来ませんでした。十二時頃に駅舎の電灯も消え、上り下りのホームの常夜灯だけが暗く付いていました。規則に厳格な軍隊がどうして交代時間が守れぬのか疑問を感じ、イライラするばかりでした。着剣した銃を小脇に挟み、箱積みの周囲を警戒しながら歩きました。丁度このホームが、入隊当時の行橋駅ホームにそっくりでした。私が入隊する時、行橋教会の方々や町内の方々が行橋駅ホームに見送りに来られた時を思い出しました。列車到着前に、送別の讚美歌が歌われた日のことが浮かんできました。歩きながら、声を出して唄いました。

「神共にいまして、行く道を守り、あめの御糧もて、力を与えませ……」、そのうち午前三時頃となり、大分体も疲れたの

で、一番北側の糧秣箱の上に腰掛け、銃を肩に立てかけて、うっかり眠り込んでしまいました。夜明け前の五時頃になった頃、「おい、ここには歩哨はおらぬか。誰かいなか」と大声が数回聞こえました。私は腰掛けたまま、「はい、ここに居ます」と言って、やっと立ち上がりました。

眼前に何処の部隊か分からぬが、少尉の胸章を付けた将校が立っていました。「貴様は歩哨か？今まで眠っていたではないか」「気をつけ！」と号令を掛けられ、私が不動の姿勢を取って立ち上がると、右手で私の顔を何回も殴りました。そして「貴様の部隊名と名前を言ってみよ」と命じました。私は次のとおり、「台湾第八七二部隊、野砲兵隊の前田隊、鈴木二等兵であります」と答えました。将校は手帳に記入しながら、「そうか、野砲隊か。俺は歩兵隊であり、直接関係ないが、ここを通りかかって、軍用品の集積場所に歩哨が見えないのはいささかおかしいと思ひ立ち寄った」。「理由の如何を問わず、任務は絶対に遂行するように、よいか」と言って立ち去った。口の中が切れたのか、口から唾液と一緒にかなりの血が流れ出ました。

朝八時頃の到着列車で、石井見習士官殿が交代要員を連れってきました。見習士官殿は、「やあ、貴様には申し訳ない。昨日は到着した台南での部隊の設営その他諸準備に追われ、約

東の九時に来れなかった。夕食も朝食も欠食させ、重ね重ね申し訳なかった」と詫び、「直ちに交代し、今から駅前のレストランに連れて行くので、付いて来なさい。」とところで、お前の頬が腫れているようだから、どうしたのか」と、質問を受けました。私は、「はい、昨夜から歯が痛んでいるので腫れたのでしよう」と答えました。

駅前の飲食店に伴われ、「鈴木、何が食べたのか、遠慮なく言いなさい」。私は「では、チャーハンと中華スープをお願いします」と答えました。石井見習士官殿は、台湾人の主人に注文しました。そして「食事が終わったら駅舎に待っている、すぐに来るように」と言って、店主に食事代を支払い、店を先に出て行かれた。私は昨夕から二食抜いていたせいもあって、チャーハンと中華スープをペロツと平らげました。これを見ていた店主は、「兵隊さん、お腹空いていたのでしよう。もう一杯同じものを作りますか。お金は要りませんよ。サーブしますよ」と言われました。私はすかさず、「お願いします」と告げました。食べながら、こんなに旨い焼き飯は今まで食べたことがないような、美味しさに思えました。

店を出る時、「ありがとう、大変美味しかった。機会があったら、また来るからね」と言って店を出ました。

駅舎に帰った私は石井見習士官殿の引率で、下りの台南行

きの列車に便乗し、台南の本隊に向かって出発しました。

三 台南市内の本隊に着任

列車は台南駅に到着しました。さすがに南の一大都市だけあって、建物も大きく、乗客の出入りもかなり混雑していました。丁度、小倉駅を思い出すようでした。待合所では多くの男女が集まって互いに何かしゃべっているが、これが台湾語と云うのだろうか。中国語とはまた一味違った言葉のようでした。

石井見習士官殿が、売店からサイダー二本を買って来られ、「喉が渴いたので、君も一本飲みなさい」と言って、一本を私に差し出されました。「ありがとうございます。頂きます」と言って受け取り、直ちにラッパ飲みしました。何年ぶりに飲んだのか、格別の味でした。

駅前から部隊本部のある大林区まで約四キロの距離があるとのこと、見習士官殿に連れられ、台南駅より南東方面に歩き出しました。市内の繁華街を通過し、台南から高雄方面に通じる幹線道路を進みました。道路の沿線には、椰子の林やサトウキビ畑、ニラ畑などが続く風景となり、約一時間位進んだ頃、民間の事務所や倉庫・住宅等が立ち並んだ大林区の四つ角に到着しました。

この中隊本部の建物や各班の建物などは、台湾製糖株式会社の社宅や倉庫を軍が借りて、兵舎や倉庫として使用しているものでした。中隊長殿に帰着の報告をすると、隊長殿は「今度の勤務は大変ご苦労であった。班に戻ったら、十分休養するように」と言われました。下士官殿にも挨拶し、第四班に行きました。佐藤班長殿は、「ご苦労でした。君には昨夕交代要員の派遣が遅れ、本当に申し訳なく思っている。遅れた理由は、兵舎への荷物の搬入・弾薬の運搬・馬舎の設置等に手間取り、ほとんど徹夜となり、朝までかかった。したがって、石井見習士官殿に交代要員を差し向けるのが、朝の五時頃となった次第だ。君には本当に申し訳ないと思っている」と言われました。また、私の顔を見ていた班長殿は、「君の右頬が腫れているようだが、どうしたのか」と聞かれました。私は「はい、二、三日前から虫歯が痛んでおります」と答えました。「それはいかんなあ。当大林区の南の方の道路沿いに、台湾の歯科診療所があるそうだ。明日外出して行ったらよい」と言われました。また、中隊本部の山崎総長殿よりの伝言で、中隊事務室を明日から開設するので、鈴木が帰ったら、私の所に差し向けて欲しいとのことでした。

第四班の部屋に案内され、班内の各兵に挨拶を終え、戦友の川上二等兵に会いました。川上君は「歩哨勤務はご苦労だっ

たそうだね。二食抜きだったとか聞いていたが、とにかく元気で帰隊できてよかったね」と言って、私達の使用の部屋に案内してくれました。六畳三つの内の一つに、班員十名が同居することになっており、部屋の押入れに私の荷物は川上君の荷物と一緒に整理して置かれていました。川上君にはお礼を言って、糧秣衛兵勤務での一切を話しました。川上君の話では、同室十人にはなっているが、あなたが一晚居なかったように、各種の勤務に二、三人は出るので、結果的には、夜の部屋には実質六、七名位だと思うとのことでした。

四 中隊事務室再開

朝食後、班長殿の指示により、中隊本部に山崎曹長殿を尋ねました。山崎曹長殿は私の顔を見るなり、「おお帰ってきたか。待っていたぞ。今日から中隊事務室を開設するので、君はこれから毎日、特別勤務のない限り、毎日事務室に勤務してもらいたい。中隊長殿にも承諾を得ており、佐藤班長には伝えてある。満州当時の事務室のとおり処理すればよい。君ならできると思っている。よいな」と言われ、私は承諾しました。曹長殿が「今日は文書類を箱から出して、事務を行いやすいように整理して欲しい。昨日夕方方には、机の上に軍用電話も取り付けられているので、連隊本部や他の中隊等への通

話もできるので、必要な時は使用するように」とのことでした。したがって、文書類の整理や配列は、午前中に完了させることにしました。ついでに曹長殿に、次のようなことをお願いしました。「私は昨日から左側の歯が痛んでいますので、午後になってから、歯医者に行かせていただきたいと思います」と願いますと、山崎曹長殿は「そう言えば、右頬が少し腫れているようだな。痛むのはよくない。今からでも直ぐに行つて来なさい」と言われました。私は言葉に甘えて、直ちに行かせてもらうことにしました。

五、歯科医院での受診

午前十一時頃、事務室用の自転車を借りて、大林区四つ角から南に約二キロ位行くと、王歯科医院に着きました。早速受付の女性に手続きを取って待合室に入ると、すでに男女十数名の患者が椅子に掛けていました。この状態では、何時間待たされるかなあと周囲を見回し、受付窓口の横壁に王先生の卒業証書が額入りで掛けてあるのが見えました。これを読んで驚きました。王先生は小倉区にある九州歯科医学専門学校卒でした。私は台湾で、日本の歯科医学校で学んだ台湾人の先生から治療を受けるとは……と感激しました。

そして受付から五分もかからぬ内に治療室のドアが開い

て、王先生が顔を出して、患者一同に台湾語で何か言っていたが、その後で、「兵隊さんの鈴木さん、どうぞ中にお入りください」と言われました。中に入ると、先生は「椅子に掛けてください」と言われました。王先生は日本語がさすがにお上手でした。次に私に、「当院では、兵隊さんには一般患者さんより優先して、診療していただきます」と言われました。

早速、診察が始まりました。先生は口の中を口内鏡で見ていましたが、「あなたは右頬をかなり強く殴られたのではないですか。口内に裂傷を起こしてあります。同時に虫歯部が折れています。したがって、今から虫歯の治療をし、後でうがい薬を投薬しましょう。当分四、五日位通院してください」とのことでした。虫歯部分を少し削りますと言われ、



部屋の隅に置いてあった足踏み式ハンドグラインダーを引き

寄せ、私の口を開かせ、足で踏みながら口中にグラインダーを差し入れ、虫歯部に当てて削り始めました。痛みと共に足踏みの動きが口に伝わり、顔が大きく揺れて、とても我慢ができない状態でした。歯の穴に薬を含ませた綿花とコムを詰め、やっと今日の治療が終わりました。が、明日も来院することを思うと、苦になりました。

治療後、先生に「先生は九州歯科医学専門学校を卒業されたそうですね。学校の場所は北九州の小倉市にありますね。私は小倉から日豊線で少し南にある行橋町に住んでいます」と言いました。先生は「それは大変懐かしいお話ですね。私は半年に一度くらい学友数人と別府温泉に行きましたので、行橋駅はよく覚えていますよ。確か同級生に行橋から来ていた生徒がいたと思いますので、同窓会名簿を調べてみましょう」と言われました。また「私は学校入学した時、一緒に入学した友人と二人で学校近くの清水町の民家に六年間卒業するまで下宿し、学校に通っていました」と言われました。私は「先生とゆっくりお話をしたいと思いますが、他の患者さんにご迷惑をお掛けしてはいけませんので、今日はこれで失礼します」と挨拶し、受付で薬をもらい、治療費を支払って、診療所を後にしました。

(以下、次号)





2005年 1 月 16日

福岡大濠公園教会



2005年 1 月 4 日

八幡前田教会



2005年 1 月 4 日

八幡前田教会

編集後記

◎ 「ぶどうの木」第三一号をお届けします。

前回三十号は、二〇〇三年十月発行でしたから、二年ぶりとなります。

◎ この二年の間に、いろんな事がありました。榎本先生が二〇〇二年に召され、百合子先生も後を追うように天に帰られましたから、急に寂しくなりましたが、主は和義先生、伊規須先生、金生先生を備え、同じ福音、同じ信仰に預かることができ、今日まで恵まれた礼拝生活を送らせていただいている事は、まことに感謝であります。

◎ 昨年は和義先生のご病氣、八幡前田教会に駐車場用地が与えられるなど、教会にとっても大きな出来事がありました。全ては主の栄光となりました。

今回の「ぶどうの木」はこれらの記事が載せられ、教会の良き記念となりました。また皆さんの尊いお証も、一人ひとりの良き記念碑となることでしょう。

◎ 「ぶどうの木」は、主の恵みのタイムカプセルでもありません。皆さんの投稿をお待ちしています。(S)

発行 二〇〇五年九月

発行者 福岡市中央区鳥飼二―二―二六

基督伝道隊 福岡大濠公園教会

牧師 榎本 和義

発行所 基督伝道隊

八幡前田教会

福岡大濠公園教会

戸畑教会

印刷製本 北九州印刷株式会社